
飛ばされた 2人のチート

にきにき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛ばされた2人のチート

【NZコード】

N7529V

【作者名】

にきにき

【あらすじ】

どこにでもいる普通の大学生だった2人の青年がある日、神、という存在よつてチート能力を与えられて異世界に飛ばされた。これは2人がチート能力を使い、異世界で生きていく、という物語である。

* 2人と言いつつ、基本主人公は片方で、もう片方は暫らく登場しません。

飛ばされた2人と危険な神（前書き）

この物語は、主人公達がアニメや漫画の技や武具を使い、戦います。ですが、原作のキャラは登場しませんので、例えどこかで見た事があるようなキャラが居ても、それは他人の空似です。

これを読んで、興味を無くした方、嫌悪感を感じる人は戻つて下さい。

飛ばされた2人と危険な神

「いやー、今日は楽しかったな。」

「そつか、それなら良かつた。今度は、今日の続きを見せてやる」
休日、僕『端山 恵吾』は友人の『森田 一輝』家に行き、一緒にゲームをしたり、

ゲームのムービーを見たりした。

「おつ、それじゃあ楽しみにしてる」

そう言い自身に帰ろうとした、その瞬間に光りと共に浮遊感を感じ視界が

ブラックアウトして

「へ？・・・」

「なつ！・・・」

意識を失つた。

「う、うーーーん・・・、えっと、あれ？」

恵吾は目が覚めて少しほんやりとしていたが、意識が次第にハッキリしてきた。

そして、周りの様子を見ると、周囲は真っ暗で何も見えなかつた。唯一、見えたのは

隣で意識を失っている一輝だった。

「お~い、一輝 起きてくれ」

そう言つが、一輝は目を覚まさない。一輝は、一度寝ると中々起きない。それでも、

何度か呼びかけると目を覚ました。

「んつん~。恵吾？ あれ、何で俺、寝てるん、だ・・・。って何だこれ？」

自分が真っ暗な場所に居る事が分かり、一輝は慌てだした。
しかし、恵吾はいたつて冷静だった。

（え？ 何で僕は冷静なんだって？ ああ、それは、小説とかだと、

）「つい展開の場合は

大抵こうしていると神様とかが・・・）

恵吾が何やら考えていると、目の前が淡く光り人の形になつた。

「やつと目を覚ましたわね」

（ほらね、それで姿は可愛い女の子なんだ、よ、ね・・・・つて）

恵吾はその姿を見て愕然とした。なぜなら、その姿は

「化け物？！」

目の前に居たのは、2メートルはあるつ身長に筋骨隆々の体、肩まである銀色の髪を

したほぼ半裸の、おっさんだつた。

「だつれが、化け物よ！ ！ どつからどつ見ても可憐で美しい乙女
じやないのよんつ」

「アホか！ お前が乙女つて、謝れ！ 全世界の乙女に謝れ！」

「そつだそつだ、それと体をクネクネさせるな。目が腐るー！」

おっさんの乙女発言に切れた恵吾と一輝が直ぐに反論し叫んだ
けれど

「なうんですつて、揃いも揃つて、言いたい放題言つてくれるわね
え。お仕置きしちゃうわよつ！」

凄まじい威圧感に、押されて反論できなくなつた。 2人が黙
つたのを見ておっさんは満足そうに

「うふふつ、それで良いの。ワタシつておしゃべりは好きだけど、
今はおしゃべりしてゐる場合

じやないのよね。実はあなた達にお願いしたい事があるの

さつきので少し落ち着いて冷静になつた、一輝が

「はあ？ も願い？」

そう言つた。 恵吾は何となく展開が読めてきたが、一輝はこ
うこう状況になる小説は

あんまり読まないから話しが見えずに、そう繰り返した。恵吾は状況的に察しはついていたので、とりあえず可能性を聞いてみた。

「それって、もしかして異世界に行つて魔王を倒すとか、異変をして欲しい、とか？」

「あらん、物分かりが良いわねえ。その通りよ。実はワタシが管理してる世界で何だか、異変が起きてるの。それで原因が分からないのよ。

おまけに干渉しようにも神様が下手に干渉しちゃうと余計に、やっこしい事に

なっちゃうから出来ないのよ。それで、あなた達に何とかして欲しくて、ここに

呼んだつて訳よ。ちなみにその世界には魔法とかがあるのよ」

やはり当たりで、おっさんは

「だから、おっさんじゃ無いわよ

「字の部分に突つ込み入れるな！」

「あら、そういうあなたも人の事言えないわよ」

「おい、俺を置いて2人で話を進めるな！！

・・・ゴホン、乙女（自称）の話を聞き予想通りだった

が、恵吾には疑問がある。

「何で俺達なんだよ。他の人間じや駄目のかよ」

「それはね・・・・・うふつ、ひ・み・つ

うふふ、と笑いながらそんな風に言つて來た。

（（いや、それは無いんじゃない？））

2人はそう思い一輝が何とか聞こうとしたが、

「おい、秘密つて・・・

「あ～ら、乙女には色々と秘密があるものよつ。男なら、その辺は察しなきや

ダメダメよん」

体をクネクネさせながらそう言った。

いくら聞いても無駄だと察したので、一輝にこれ以上聞いて

も無駄な事を身振りで伝えると、

呆れたように溜息をつき理解したと、返した。

「はあ、まあいいや。分かった、僕は協力するよ。正直言つて興味があるしね

「・・・はあ～、俺も協力してやる」

恵吾は言つたように興味があるし、こんな機会2度と無いだろうから、

了承した。一輝の方もある程度、諦めた、とでも言つ様な状態で、渋々だが了承した。

「うふふっ、あなた達なら、そう言ってくれるって信じてたわ。それじゃあ、私からの

プレゼントをあげるわ。あなた達に一つ『力』をあげるわ。

さあ、どんなのが良いの?」

それを聞き、恵吾は

「それじゃあ、僕はアニメや漫画、ゲームとかに出てくるキャラクターの技や能力、

それに伴う体質を完全に使いこなせる状態で欲しい。これで良い?

一瞬で反応してお願いした。あまりに、早く言ったので、隣の

一輝は

「はやつ!/? もう決まったのかよ」

そう言つた。

「あはは、実はもし、こんな事があったらこれが良いなあって考えてたんだ」

「・・・あつそつ」

その発言に呆れた、というか少し疲れた感じで何か言いたげに、反応した。

(うん、分かつてゐる。厨二病と言いたいんでしょ?まあ、何となく自覚はしてるよ。

だから、そんな可哀想な人を見る目で見ないで、結構きついんだよ)

「んじゃ、俺はどうするか・・・」

「だったら、武器やアイテムを使えるっていつのは?」

「武器系は一輝の方が詳しいから、そういうのもあり、そういうと

一輝は少し考えて、

「ああ、それは良いかもしれん。・・・んじゃそれで」

「そう言ってその能力にした。多分、頭の中にはさつきまで見てたゲームの武器が

思ひ浮かんでいるのだろう。

「分かつたわ。恵吾ちゃんが『技や能力を完全に使いこなせて、それに伴う体質の変化』

一輝ちゃんは『武器やアイテムを自由に出せて、その扱い手であり使い手になる』ね。

「それじゃあ、おまけで本来なら掛るマイナスは消しておくわね。・・・はい、これで良いわ。

「それと、何か他にお願いってある?『力』に関する事以外なら、叶えてあげるわよ」

「そんなオマケまでは、『気前が良い』と恵吾は願いを告げる。

「それじゃあ、今までのマンガやアニメ、小説それと新しいのが出たらそれも出るようにして欲しい。そういうないと、これから、何か出た時に困るから」

「あ〜、確かにそうだよな。それじゃあ、俺もそれを」

「これで、最新刊とかが出ても見れる、しかもタダで。と、思いもう一つの、そして、

「ある意味最も大切で重要な願い

「それと、もう一つ・・・僕がもと居た世界に初めから僕が居なかつた、つて事にして欲しい」

「はあっ! ? 何でそんな事・・・」

「その願いに一輝は驚き、大声でそう言つたけれど

「そうしないと、家族が悲しむでしょう。だから、そうしてくれ」

これが恵吾の心残りな事だった。もし、行き成り行方不明になつたりしたら、家族は

悲しむだろうし、下手したら、それが原因で家族崩壊なんてなるんじや無いか、と色々と

不安で仕方がなかつた。

(だから、この願いだけは譲れない)

・・・分かつたわ。 恵吾ちゃん、あなた家族思いなのね。嫌いじゃないわ、そういうの。わかつたわ、そもそもワタシが原因だものね、

微笑みながら、そう言った。

「それじゃあ、俺も同じようにしてくれる?」

一
精
子
同
日
見
第
九
卷

あなたを送るわよ。準備は良い? 一
あなたを送るわよ。準備は良い?
あなたを送るわよ。準備は良い?
あなたを送るわよ。準備は良い?

「良こよ、速くじてくれ」

「おお、また、樂しかったのか」

「二人は顔を見合せ、話した

—ツ！ ！ ！ ！ ！ ！

「「どうあ～～～～～つ

その怒声と共に2人は上に飛ばされた。2人が飛ばされ完全に

姿が見えなくなると

に幸あらん事を「

そう呟いた。

飛ばされた2人と危険な神（後書き）

ここまで、読んで下さった皆様、ありがとうございます。

バトルシーンは今回は無く、プロローグ的な内容でしたが分かりにくい所があれば

教えて下さると嬉しいです。

それと2話以降では、その話で始めて出た、能力等をここに書いていきます。

とばされた世界と、チート能力

「う、うーん。ここは……森？何で僕こんな所に居るんだ？」
恵吾は田が覚める前の事を思い出そうとした。

「えっと、確か一輝の家で遊んで、帰ろうとしたんだよな。
それで……って、思い出した。確か神に異世界に行つて欲しつて
言われて飛ばされたんだっけ……」

周りを見渡すと木、木、木、木と草と花しかない。状況的に、ど
こかの森である。

面倒な事になつたな。そう考えていた。

（まあ、勇者として召喚されなかつたつて事は、この世界には、
そういうシステムが
無いつて事なのか　な？まあ、何にしても今の状態じゃ情報が少な
すぎる）

考えてはみてみるが、どれも、ただの推測であり、決定的なモノ
は何も無い。

「さてと、これからどうする？　一、輝……。あれ？一輝、
おーい一輝、どこいった~」「

暫く探してみると何処にもいない。という事は別の場所に到着し
たつて事か……。
どうしようか……。そう考えていると
バサツ、バサツ、
（ん？何の音だ？）
キヨロキヨロ

周囲には何も居ないし、草木も揺れて無いな。それならば何処か
ら……
まさか！？　そう思い上を確認してみると

「ギャアアアア——ツ」

田測でも全長が20Mはある鳥が事が頭上を滑空していた。でつかいなあー、やつは異世界って違うな。と関心してたら、そのまま降下してきた。

「ウソ——ツ！ 食われる——ツ」

恵吾は直ぐに走り出した。森の中に完全に入ってしまえば見失うだろ、う

そう思って走り出したが・・・未だに追つて来ている。普通は見え失うだろ！

そんな突っ込みも虚しく鳥は無情にも追ってきた。

「ゼーハア、ゲホツ、ハアハア。も、もう駄目、限界・・・」

元々体力なんて無い上に木の根で足場の悪い道を数百M走れた、これだけでも

凄いのにこれ以上は、もう無理っぽい。どうするれば・・・、と考えていたが、

「いかん！忘れてた。今の僕には力があった。となれば」

恵吾は鳥の方を向き右手を構えて

「喰らえ、『ザケル』*1」

そう叫ぶと、右手から青白い電撃が放たれた。

「グギイ——ツ」

鳥は叫び、苦しみ高度を落とし地面に落ちた。しかし、すぐに態勢を立て直すと

再び、空に上がった。それを見て

「威力を落としすぎたか・・・なら、『テオ・ザケル』*2」
先程よりも大きな電撃が放たれ、またも鳥に直撃した。

「グギヤア――――ア」

鳥は再び落ちて今度は動かなくなつた。

「あ～、ビックリした。焦つて力の事を忘れるなんて、我ながら情けないな・・・。

それにもしても、本当に出来たよ。凄い、何か感動する」

1人で余韻に浸りそう思つていたが、とりあえず、目の前にあるこれを如何にか

しなければならない。このまま放置しておけば迷惑になるだらうから・・・。

「というか、ついつい倒しちゃつたけど良かつたのか？もしかして、絶滅に瀕している生き物だつたり、神聖な生き物とかだつたらシャレにならないな」

今更ながら自分の行つた事が危険な行為だつたのではないか、と思ひ慌てだした。

「とりあえず、証拠隠滅とくか、えつと、モノを仕舞うには、よしこれで良いか『月衣』＊3これに入れておくか。んじゃ『力』＊4ヨイシヨウつと。

うお、凄い。簡単に持ち上がるし、重さを対して感じない

テンションが上がり騒ぎながらも鳥を持ち上げ、それを体に近付けると、

先端から消えていく。正確には『月衣』内に仕舞つたのだ。そして、これからのこと

について考えた。とりあえず、近くの村にでも行つて、情報を集めるのが良いと

判断し、村を探すことにした。となれば、やつぱり空から探すのが1番手つとり速いと

考え、空を飛ぶ技を思い浮かべると、上昇していく。

「『舞空術』＊5つてやっぱり便利だな～あ。さてと、村はどうだ？」

そのまま、暫く上空を飛びまわつてゐると、煙が見えた。さうして、

その方を

よく見ると、家等が幾つか見えた。おそらく、村だらうと思つた。
「それじゃあ、このまま近くまで行つてそこから歩いていけばいい
か」

そう言ひ、そのまま近くまで飛んで行つたが途中で異変に気付いた。煙は登つていた、

しかしそれは、沢山の家が燃えていたのだ。

「これって、冗談だろ」

そう言い、恵吾は速度を上げ村に行つた。

「よし、お前らはあつちから行つて、奴らを追い詰めろ」「へいっ」「へいっ」

村は所々で火の手が上がり何にも悲鳴も聞こえる。そこで1人の男が何人かの

人間に支持を出していた。その男は他の人間とは違い、汚れてはいるが鎧を着ている等、

他とは違つてゐる。今、村を襲つてゐる盜賊達のボスの命令で手下達と共に

村を襲つてゐるのだ。

「これで、ボスも文句もねえだろ。最近、奴らの取り立てが頻繁になつてゐて

愚痴をこぼしてたからな。全く、だからって俺たちこ
当たるこたあねえのによ

「はあはあ、走れ！早くしないと奴らに追いつかれるぞ」

男がそう言い妻と共に自分の子である小さな男の子と女の子を抱えながら

走っていた。

「お父さん・・・」

男に抱きかかえられている男の子は不安そうに聞いたが、男は微笑み

「大丈夫だよ。お父さんが守つてあげるから」

そう言って、子供達を安心させようとした。しかし

「おつと、逃がさねえよっ」

前から1人、後ろから2人

「お前ら全員、大人しくしろよ。そうすれば命は助けてやる」

「いっひひ、そうそう、さつさと捕まりな」

3人に囲まれ、さらに周りは燃えていたり、家が崩れている等で逃げ場は無くなつた。

（こうなつたら妻と子供達だけでも・・・）

「お前達は逃げろ！ うおおお――」

男は前に居る1人に向かつて突つ込んだ。1人だけなら、時間稼ぎ位はできる。

それに上手くいけば倒せるかもしれない。そう思い行動した。しかし

「へつ、馬鹿な奴だ。1人ならどうにかなるとでも思つたか？ 「

焼きはらえ ブラン」」

そう唱えると、掌から掌大の炎が放たれた。

「ぐあつ、くつ、魔法士、か」

その炎が体に直撃し、当たつた部分はかなり酷い火傷になつた。

「その通り。ホント、馬鹿な奴だ。まあいい見せしめにお前を殺すとするか」

そう言い動けない男に近付き、剣を出し振り被つた。

「止めてっ、あなたー」

必死の叫びも虚しく盗賊は

「はつ、死ねえ——」

剣を振り被つた。男は、もう駄目かと諦め目を瞑つた。そして・

「がはつ・・・・」

「え? 何で・・・・・」

目を開いてみると、斬られておらず、先程まで自分に斬りかかるうとしていた

盗賊が引つくり返つていた。そして、自分の前には1りの青年が居た。

「ふう、間に合つたかな? 大丈夫、じゃないですね。『ウリップス』

* 6

そう言い手を翳すと、体の周りが光、火傷を含めた全ての怪我が治つていた。

突然の事に訳が分からず、

「け、怪我が治つた。 き、君は一体・・・」

「えつと、僕は恵吾って言います・・・」

恵吾は『舞空術』空から来た時、偶然この現場を見付け上空からドロップキックを

したのだ。恵吾が自己紹介をしていると蹴られた男が立ち上がりて、手前いきなり何しやがる。痛えじやねえか

そう叫んだ。それにより、茫然としていた残りの2人もハツとした。

「・・・はあ、取り合えず」いつらをぶつ飛ばしてから説明します

そう言って目の前の盗賊を睨みつけた。

(正直に言つと、恐い。当然でしょ。元居たせかいでは、こんな経験したこと無くて

精々、組手か、たまゝにする喧嘩位しか無いんだぞ。ハツキリ言つ

て、

ちょっと震えてるんだぞ)
「ふざけんなつ。1回不意打ちが成功したからつて良い気になつて
んじやねえ！」

「焼き払え ブラン」

そう言つて、盗賊の奴は炎を放つてきた。半ばヤケクソ氣味に左手を前に出した。

「うおお——」

そいつの炎は左手に吸収された。

「う、嘘だろ。魔法が効かねえ」

(あいつからは、そういう風に見えたのか……まあ、いいか。い
くぞ！)

「効かないんじやない。吸収したんだ。喰らえ『第4波動』*7」
右手を突きだすと同時に叫ぶと、右手から炎が一直線に放たれた。
「・・・くつ？」

それは盗賊のすぐ横を通り上空に消えていった。あれ？ 外した
か。やっぱりまだ

上手く使えないな。能力自体は上手くいっても当たられなかつた
ら意味無いしな。

「な、何なんだテメーッ！ も、おいつ、お前ら何ぼさつとしてん
だ。

3人掛かりで一気にヤルぞ」

「あ、ああ」

そう言つて剣を抜いて3人で前と後ろから斬りかかつて來た。

「なら、ふー、『流水制空圏』*8」

敵の剣を全てほんの僅かな動きで回避した。

「『D・F・H』*9」

叫ぶと同時に3人は吹き飛んだ。一瞬の出来事に周りに居た。家
族はもちろん、

吹き飛ばされた当の本人達でさえ何が起つたのか気付けなかつ

たようだ。

「さて、改めて、そちらの人達は怪我とかしてないですか？」

「え、ええ。お陰さまで」

「そうですか、良かつた。それにしても酷い有様だ。盗賊に襲われている

みたいですけど……」

「え、ええ。そうなんです。あいつら少し前に行き成り襲つてきて、何人か戦おうと

したんですが、何せ盗賊達は数が多く、手に負えませんでした。そして、その後、

私達は村の皆は直ぐに逃げようとしたのですが……」

「・・・それじゃあ、他の人達は？」

「既に捕まつてしまつた人達も居ますが、逃げ延びた人達も居ると思ひます。

その人達はおそらく、村長の家でしょう。あそこには避難用の地下室が

ありますので……」

それを聞き、怪我人が居る可能性も考え、恵吾は同行する事にした。

恵吾のお人好しな性格もあり、このまま見て見ぬフリも出来ないしと判断し、

「成る程、だつたら他の盗賊達が来る前にそこに行きましょう」

恵吾ががそう言うと、少し驚いた様だつたが、

「え、ええ。分かりました、こっちです」

そう言って案内してくれた。

あの後、どうにか他の盗賊達には会わなかつた。盗賊達が居たのは村の端の方だけで

村の奥には、まだ侵入して来て居ないようで火は放たれていないし、

物も壊れていなかつた。目的地である村長の家に着いた。他の家よりも大きかつた。

「ここです。ほらおいで」

父親は子供達をそう言つて促していた。

「誰じや?」

家中にあつた隠し扉を開けて下に進むと、地下室があつた。中は薄暗く、ランプの光がチラホラあるだけだ。そこには、老若男女が何人か居たけど怪我をしている人が

何人も居る。皆、暗く空氣もとても重かつた。その中に居た、髭を生やした老人がこちらに気付いて近付いてきた。

「村長、安心して下さい私です」

「おお、君か。良かつた無事じやつたんじやな」

どうやら、その老人が村長のようで、男がそつまつと安心したみたいだ。

「ええ、何とか。それより他の人達は……」

男が地下室を確認しながらそう言つた。やはり人数が少ないから、恵吾は

もしかして、と思つたが、やっぱりかなりの数が居ないみたいだ。
「ああ、奴らが襲つてきた時、近くに居る者達は逃げ込めたんじやが……」

遠くに居た者達は……。それに、ここに居る者達も怪我をしている
者がある……

「……」

村長がそう言つと、男は俯いてしまつた。しかしそれも、当然だ
と思えた。

同じ村の人達が何人も居ない、おまけに怪我人も沢山いる。辛い状況だろ？・・・。

「ん？ そこにあるのは・・・、つ！？ 何者じや？」

恵吾に気付いた村長さんは、見た事が無い顔だった事から恵吾に向かつてそう言った。

だが当然の反応だ、見た事無い人がここに入ってきたのだから、怪しんでも仕方ない。

しかしそれによつて、同時に空気が一気に張り詰めたものになつてしまつた。

どうするか考へていると・・・

「ま、待つて下さい。 彼は盜賊に襲われていた時に助けてくれたんです。

敵ではありません」

警戒を解くにはどうしたら良いか考へていると、そう言い恵吾を庇つたけど、

中に居た人達は恵吾に対して疑いの目で見つけていて、信今にも飛び掛かつて来そつた。

「・・・しかし、状況が状況じゃ。 そう簡単には信じられん」

確かに村長という立場上、いや、そういうのを関係無しにしてもそう簡単に

信じれなあらう。 なら、こういう場合はどうするべきか考えてみると、奥に居る

怪我人達が目に入った。

「なら、これならどうですか？『ラリップス』 * 10」

地下室全体が光りに満ちて、それが収まるごとに地下室に居た人達の怪我が治つていた。

「け、怪我が治つた。 魔法士？」

「ええ、これで信じてもらえますか？」

恵吾がそう言うと何人か戸惑つていた。 やつぱり治療をしたぐらいじや駄目かな？

そう思つてゐると村長が僕に近付いてきて
「・・・うむ、信じよう。疑つてすまなかつた。それと、皆の怪我
を治して頂き

感謝します」

それを聞き、恵吾は少し驚いた。信じて貰つ為にやつたのだから、
信じて貰えたのは

嬉しい。しかし、感謝までされるとは思つていなかつた。それで
も信じて貰えた事が

嬉しく、安心したが周りに居た若者、数人は文句があるようで
「村長、怪我を直したぐらいで、信じては・・・」

「大丈夫じゃ。これでも長く生きて色々な人を見て來た。この若者
に悪意はない」

その一言で、納得していなかつた人達も渋々だが納得したみたい
だ。それに、

周りの空氣も少し軽くなつた。

「それじゃあ、これから話しあわせましょうか」

恵吾がそう言つと皆は真剣な表情になつて恵吾の方を向いた。

とばされた世界と、チート能力（後書き）

第2話更新完了です。

やはり、物語を作るのは難しく村人達との会話が難しいです。
戦闘に関しても、恵吾の一方的な攻撃で終わってしましました。
これからは、もう少し上手くなれるようにしていきますので、よろしくお願いします。

解説です。見方としては

技名 使ったキャラ 登場作品

簡単な解説

という感じです。

* 1『ザケル』 ガッシュュ ゼオン 「金色のガッシュュベル」
手、又は口から電撃を出す術です。 手からの場合は青白く、口
からの場合は

黄色です。 込めた魔力にもよるので、はつきりと言えませんが、
威力的には
あまり強くありません。

* 2『テオ・ザケル』 ガッシュュ ゼオン 「金色のガッシュュベル」
早い話が『ザケル』の強化版といった感じです。ただ、同じ魔力
を込めた

時にこちらの方が燃費が良いといった感じです。

* 3『月衣』（かぐや） ウィザード 「ナイトウィザード」

この話では、物を収納する能力しか出しませんでしたが原作では世界結界の影響を受けずに活動できるようになる。というのが重要です。

* 4『力』（パワー） 未央 ブレイド アークライト 「NEEDLESS」

読んだ、そのままの能力です。これは自身の身体構造を遙かに超えた力を

発揮することができるようになります。

* 5『舞空術』 気、もしくは魔力を使える一部のキャラ 「ドラゴンボールシリーズ ネギま！」

気、もしくは魔力を使う事で、空を飛ぶ事が出来るようになる。

* 6『ウリップス』 呪癒士 「・h a c k G · U ·」
1人を対象に治癒する魔法。

* 7『第4波動』 左天 「NEEDLESS」

炎や周囲の熱エネルギーを吸収し、それを炎として放出する能力。威力は吸収した熱エネルギーに比例し、高い熱であればあるほど威力が増す。

* 8『流水制空圏』 白浜兼一 風林寺隼人 「史上最強の弟子ケンイチ」

体の表面薄皮一枚分に強く濃く気を張り、相手の動きを流れで読み取り攻撃の軌道を予測、最小限の動きで攻撃をかわす。ただ、本編では動きのみを読み取つただけである。

* 9『D・F・H』（ディーンドライブ・フォックス・ハウンド）セツナ ブレイド アークライト 「NEEDLESS」

マッハ2の速度で敵を攻撃する技。これは『速』(スピード)の能力の応用である。

*10『ラウリップス』呪癒士「・R a c k G · U ·」
ウリップスが単体に対して発動するが、これは全体に掛かる魔法である。

「さてと、これからどうしますか？」

僕の方を見ている人達にそう聞くと、若い人達が
「どうするつて、決まってるだろ。捕まつた皆を助けに行くんだ！」
「でもよ、助けるつて言つたつて、皆がどこに居るか分からないのに、

どうやって助けるんだよ」

「それに、もし盗賊達に見付かつたら、どうするんだよ」
ある者は助けようと、またある者は恐がり、口々に言つた。暫く
言い合つてゐるが、中々決まらなかつた。そうしてみると

「・・・落ち着かんか！」

皆に向かつて村長が一喝した。それにより、騒いでいた人達も静
かになつた。

「しかし、早くしないと皆が・・・・・」

「じゃから、落ち着けと言つてあるのだ。何の策も無しに、ただ闇
雲に

突つ込むだけでは、何の解決にもならんじやろ。・・・それに、皆が
どこに居るか分からなければ、ただ捕まりに行くようなものじや・・・

・
「そう言われ、いきり立つていた人達は、黙つてしまつた。外の様
子か、

なら大丈夫だな。その事を伝えないとな。

「・・・あの、外の様子なら調べる事が出来ますよ

そう言つと、即座に皆が反応した。

「「「本当か！？」」

「一、二、は、はい。少し待つて下さい。『白眼』*1

皆の声が割と大きくて、驚いてしまったが、すぐに落ち着き発動した。

発動と同時に視界が広がり、壁を抜けて地上が見えた。

（うわっ、初めてだとこれキツイな。少し、気分が悪くなつたかも…。うう、我慢我慢。えつと、村の人達は何処なんだ…。？）

捕まつた人達は見つかつた。

「…見付けました。捕まつた人達は、この家の正面から見て右側、村の入口付近に集められています」

「…おそらく、そこからアジトに連れて行くんだろう。そうだ！怪我をしてる人は居ないか？」

そう言われ、確認してみると大人が何人か怪我をしているが酷い怪我をしている人は居なかつたし女性や子供は怪我をしていなかつた。

「大人の人人が何人か怪我をしてるけど、皆軽傷です。他の人は、怯えてはいますけど怪我はしていません」

「それで、盗賊達はどうだ？」

そう聞かれて

「見張りが10人、少し離れた所に15人、村全体に20人ですね『白眼』を使い分かつた人数と場所を伝えた。

「…凄いな。そんな事まで分かるなんて、君はもしかして名の知れた魔法士なのかい？」

へたに答えるとボロが出てしまって、余計な事は言わない為

「まさか、まあ、色々と事情があるから詳しくは言えないけど…」

「そうやって適当に誤魔化すと、納得はしないが何となく察した

のか

それ以上は何も聞いてこなかつた。

話していると、奥に居た他の男が

「なあ、それでどうやって助けるんだ?」

「僕が、見張りの盗賊達を倒すから、皆さんは捕まっている人達と一緒に安全な場所に避難して下さい」

聞いてきたから僕がそう言うと、驚き言つた。

「ちょっと待て。いくらお前が強いっていっても、一人であいつらと正面から戦うのは無茶だろ!」

確かに普通はそう思うだろう。だが、恵吾にはどうにかする技に幾つか心当たりがあるから問題ない。

「大丈夫ですよ。正面から、何て無茶はしませんよ。こっそり近付いて不意打ちで倒しますから」

それを聞いて、1人の人が

「・・・そんな魔法まで使えるなんて、あんたもしかして、創形術師なのか?」

(? 何だそれ、聞いた事が無い・・・って当たり前か)

「創形術師?」

「あれ、違うのか? 聞いた事無い魔法だから、てっきりあんたが作った魔法かとおもつたんだけど」

恵吾が繰り返すと聞いてきた人が、少し意外そうに言つたので、その言葉の意味から予測して

「・・・もしかして、自分で新しい魔法を作る人の事ですか?」

そう言つと、当たつていたようで、

「ああ。俺つて昔、魔法士なりたくて勉強してたんだけど、その時に自分で新しい魔法を作る人が居て、それが創形術師だつて・・・」

予想は当たつていたようで、話しを合わせておく事にした。

「・・・成る程、だつたら僕は創形術師ですよ。ははっ、すみません。僕が住んで居た所とは呼び方が違うから、分かりませんでした」

そう誤魔化すと、納得したようで何も言わなくなつた。

そろそろ、本題に入ろうと思い、

「それじゃあ、助けに行く人は誰にします？」

そう聞くと、男の人達全員が立ち上がり皆、自分が行くと言いだし、遂には全員で行くと言った。

恵吾は、慌てて言つた。

「待つて下さい。いくらなんでも、そんなにも大勢で行つたら、見付かりますよ。数人で行つた方が良いですよ」

「うむ、ならば、一緒に行く者は・・・・」

そう言い、村長は何人かを選んだ。

「それじゃあ、行つてきます」

「気を付けて下さいね」「皆をよろしくお願ひします」

残つた人達は恵吾達に励ましを言いながら見送つた。

外に出ると、早歩きで進んで行つた。外のすぐ近くは、まだ壊れたりしておらず、一見すると人が道に居ないだけで平和に見える。しかし、少し遠くを見ると火の手が上がっている家もあり、それが平和では無い事を示している。

「ちょっと止まって下さい。この先に盗賊が1人居ます」

暫く『白眼』を使いながら進んでいると、盗賊が1人僕達の進行方向に居る事が分かつた。

「1人ぐらいなら、皆で行けば倒せるぜ」

村の人はそう言うが、最悪の場合も想定して

「駄目ですよ。もし、仲間を呼ばれたらお終いです。ちょっと待つてて下さい」

そう言い『ぬらりひょんの能力』*2を発動し、行動に移した。

「き、消えた」「すげー」

傍に居た人達には僕が急に消えたように見えて驚きの声を出した。

「ちつ、あいつら何処に行きやがった。まつた、く・・・・・
盗賊は村人達が中々見付からない事に苛立ちを感じブツブツ呴い
ていた。

その時

一
ん
か
二
！

そう言い、
気を失つた

「これで良し、とついでに」

能力を解いた恵吾は、両手を合わせて地面に手を当てる。すると、手元の地面が少し動き、それが伸びて巻き付き盗城を拘束した。

「ふう、これで、もし起きても、声も出せないし動けないだら」
体だけでなく口も押さえ、身動きを封じた。

待つていた人達を呼び先に進んだ。

「それじゃあ、ちょっと待つで下さー」

恵吾達は他の人達が捕まっている場所は着くと
恵吾が再び姿を消し、盜賊達に近付き気絶させた。

盗賊達は2、3人やられて異変に気付いたが、何も出来ないまま氣絶させられた。

何だ、いつら、勝手に倒れたぞ・・・」

恵吾が姿を現すと、驚き

「うわっ、何だお前、どうから出て来た？」

「大丈夫ですよ、僕は皆さんを助けに来たんです」

「そう言つが、戸惑つていた。」
「は？あ、あんた何言つて……？」

その時、待っていた人達が駆け寄り、ロープを斬り始めた。

「おい、大丈夫か」

「え、ああ、皆大した怪我はしない。それより、どうしてここに・・・」

・・・

どうやら顔見知りのようで、戸惑いながらも安心したようで
そう聞いていたが、

「説明は後だ。それより早く逃げるぞ」

そう言って、皆と逃げようとした。だが、足を怪我している
人も居て少し手間取っていた。それを見て

「あつ、その前に『ラリップス』」

回復の呪文を唱えると、全員の怪我が治った。

「すげえ～、怪我が治つちまつた。さつきのといい、あんた一体何
者なんだ？」

「それは、つ！ 不味い、盗賊達が何人かこっちに来てる。このま
まだと、鉢合わせする事になる」

逃げながら説明する、と言おうとしたが『白眼』で此処に何人かが
近付いて来ているのが分かり伝えた。

「「「「！」」」

（まずいな、このままじゃどうしたって会つ事になる・・・。な
ら、囮になるか）

「聞いて下さい。これから僕が奴らを引き付けるので、その隙に逃
げて下さい。大丈夫、ちゃんと盗賊達とは会わない道順を教えます
ので、その通りに進んで下さい」

それを聞き、皆は動搖するが、一緒に来ていた人達が
説得して先に行く事になった。

村の人達が行つたのを確認して

「皆、行つたか・・・・・。なら、精一杯暴れないとね」

ニヤリとなり、上空に向かつて

「『火竜の咆哮』＊4」

空に向かつて放つと、大きな火柱のようになつた。

それを見て、近くに居た盜賊達は慌てて、叫んでいた。

「な、何だあれ」「あれって確かに村人共が居る場所じゃあ・・・」

そして、此処に来ると一人だけしか居らず、他の村人は一人たりとも

居なかつた。それを見た盜賊は

「おいっ！てめえ、此処に居た奴らはどうした？！」

聞かれたところで素直に答える訳無く、挑発の意味も含め

「さあ、知らないな。それに例え知つていたとしても、お前達に言う訳無いだろ」

（ああ、何だか、ちょっと感動・・・分かつてる。厨二病つて言いたいんだろう？）

自分で言つて少しショックを受けたりしていると
「てめえ、ふざけるんじやねえーーーっ」

そう叫びながら突つ込んできた。

恵吾は両手で構え

「『ゴムゴムのガトリング』＊5

「どわあ——————」

放つと、全員が連打を受け吹つ飛ばされ瞬殺された。何人かはギリギリ気を失わなかつたが、それでも満身創痍で、動けなかつた。

「う、腕が伸びやがつた・・・」

「ば、化け物だ」

そう口々にいうが、

「失礼な、僕はちゃんとした人間だ。・・・まあ、色々とチートな能力は持つてるけどね。それにしても、僕つて単純だな。テンションが上がつただけで怖いとか、そういうのが感じなくなつたんだから・・・」

そう言って、改めて自分の単純な脳細胞を嘆いていたが
「さてと、ついでに他の奴らも倒しておくか・・・」
気を取り直して、その為に行動を始めた。

救出と殲殺（後書き）

今回は、村人たちの救出と雑魚を倒すというのでした。www
この辺の敵はチュートリアルみたなものなので、割と
簡単に片付けています。

強い敵は、今後もう少し話が進んでから、といつ事になります。

技紹介です。

* 1 「白眼」 日向一族 「NARUTO」

ほぼ全方位を見渡す事が出来、また物体の透過も可能。

* 2 「ぬらりひょんの能力」 ぬらりひょん リクオ 「ぬら
りひょんの孫」

今回使ったのはそこに居ても認識されない、又は当たり前に思つ
ところへ

ぬらりひょん自体の能力であつて鬼撥では無い。

* 3 「両手を合わせ」 ハド アル等 真理を見た者 「鋼の鍊
金術師」

本来なら鍊成陣が必要だが、真理を見た場合は両手を合わせるだ
けで発動出来る。この物語では発動した時に材質の理解も行える。

* 4 「火竜の咆哮」 ナツ 「FAIRY TAIL」

口から灼熱の炎のブレスを放つ。

* 5 「ゴムゴムのガトリング」 ルフィー 「ONE PIECE」
両手を伸ばし、相手に連打を叩き込む。

戦いの終わりと騎士の到着

敵は、村全体に居るので、付近に居るの。合わせて約30人程度か。

1人ずつ倒すのも良いが、それでは時間が掛りすぎてしまう。それに、既に10人程がすぐ近くまで来ているのだから、全員まとめて倒した方が効率が良い、と考えた。いや、それよりも、どの技を使おうかとワクワクもしていた。本当に単細胞である。

少し離れた所に盗賊達は居た
「おい、見たか、あの火柱」
「ああ、俺達の中にはんなの使える奴はいねえ」
「村の奴か、もしくは・・・」
「何にしても、邪魔する奴は、ぶつ殺す」
そう言い、火柱の元に向かった。

「へへっ、見付けたぜ」

盗賊達は既に來ていたのも合わせて10人になる。

「あんな所に立つて、狙ってくれって言つてるようなもんだぜ」「馬鹿か、お前ら。あそこには村の奴らが居たんだぞ。それと、それを

見張ってる奴らも居た。なのに、どこにも見えねえ、つまり・・・」

「全員、奴にやられちまつたって事か？」

「ああ、そうだ。良いか、油断するなよ？あいつを囮んで、

「いつをぶち込むんだ」

そう言い、弓矢や銃を見せた。

盗賊達はそれを見て頷き散つていった。

その後、素早く移動して行き半円状に囲んだ。
そして、準備が整うと

「今だ、撃てえーつ！」

盗賊達が分かれて全員で半円状に囲んで、攻撃しようとしている
のは

『白眼』の力によつて既に恵吾にバレていた。なので、盗賊達が
弓や、銃、魔法で攻撃してきた瞬間に『舞空術』で空に飛んで回
避したのだ。

そして、上空から様子を確認すると指示を出していた男の場所を
確認した。

盗賊達は家と家の間に居た。

「よしつ、んじゅ行くか」

そう言い、指示をしていた男に向かつて急降下し

「『つばめがえし』* 1

「がはつ・・・

鋭い1撃で気絶させた。

「『戦いの歌』* 2 嘰らえ、『破裏剣舞』* 3

「くそつ、何なんだお前は！」

1人を氣絶させるとすぐに、一緒に居た2人を待つて居る間に

『鍊金術』で作った双剣で斬つた。斬つたと言っても刃は
潰してるので実質は斬撃では無く、ただの打撃になつた。
家の間から出ると、すぐ横から同じように1人出て来たので

「『疾風双刃』* 4」

双剣の連続切りを繰り出し倒した。

そしたら、次は右側の少し離れた所から2人出て來た。

恵吾はそちらを確認すると

「『プラクテ ビギ・ナル 光の精靈 11柱 集い来りて 敵を撃て 魔法の射手』*5」

呪文を唱え魔法を放つと全弾が命中し、
「ぎやああ————」

盗賊達は叫ぶと、氣を失つた。

今度は、反対側から2人出て來た。

背中を見せている恵吾に、チャンスとばかりに
魔法を撃つて來た。

「ふざけやがつて、「斬り裂け ウェンル」

「碎け グード」

風の刃と30cmほどの岩の塊が飛んできた。
しかし、それに対して冷静に

「『破道の四 白雷』*6

「「どわ————」」

魔法ごと、敵を吹つ飛ばした。

「『ディバイン・バスター』*7」

次に奥から、銃で狙っていた男に放つた。男は何も出来ないまま
氣を失つた。

そして、最後の男を探すと、どうやら逃げた様だ。おそらく他の
仲間達を

呼んできて、さつき以上の数で倒そうとしているんだろう。
そう考えるも、そういう事は無視した。

とりあえず、ここに居る奴らを縛つて動けないようにする為
パンツ

『鍊金術』を使い地面の土を使い、縛り上げた。

(鍊金術って本当に便利だな。エネルギー保存の法則に従えば、これだけで簡単に出来るんだからな。よし、出来た。後は、これを、つとこれでいいだろ)

気絶している盗賊達を全員縛り上げ、近くの倉庫に入れておいた。

そして、逃げた盗賊を含め残りの奴らを倒す事にした。

「んだと、そんな馬鹿な・・・」

「だけど、マジだ。実際にこの田で見たんだ。見た目はただのガキだけど、とんでもねえ強さだった」

「・・・とりあえず、一旦戻つてこの事を伝えねえと」

「ああ、急ぐぜ」

逃げた男は途中仲間に会い、先程自分が見た光景を伝えた。初めは信じようとはしなかつたが、あまりにも必死に言つので嘘では無いと感じ、信じた。

そして、一緒に戻るとしていた、その時

「そつはさせない。悪いけど、此処で倒す」

追いついた恵吾がそう言つと

「げつ、もう来やがつた」

すぐに走つて逃げようとしたが、足に魔力を込め、地面を蹴つた。

* 8

そして、1番前に居た男の腹に両手の指先を当て

「小さく前ならえ、『無拍子』 * 9」

拳を叩き込んだ。

「がふつ」

そして、残りの盗賊達に

「『渦廻斬輪蹴』 * 10」

「「「ぎやあーーーっ」」

一気に当てるど、ボロボロになり倒れた。

「ん？ これは・・・あいつら逃げたのか」

残りの敵の位置を知ろうとしたが、村に散っていた盗賊達は既に盗賊達は居なかつた。恵吾は今、倒した奴らを縛り上げて、同じように倉庫に入れた。

「奴らを追い払ったのか？」

村の人は驚きそう聞いてきた。

「ええ、何人かは捕まえたのですが・・・すみません」

恵吾がそう言い謝ると

「何を言つてんだ。あいつらを追つ払つてくれただけでも充分だぜ。なあ、皆！」

皆はそれに答え口々にお礼を言つた。

恵吾は嬉しかつた、だが、同時に不安があつた。それは「でも、もしも、また奴らが襲つてきたら・・・」

今日以上に危険になる、そう言おうとしたら

「そ、村長。今、村の入口に国の騎士達が・・・」

入口付近まで様子を見に行つていた人が戻つて來た。

恵吾達はそれを聞き顔を見合わせた。

入口付近に着くと、そこには甲冑や剣で装備した人達が揃つっていた。

その中でも、他の騎士よりも立派な装備をした人が寄つて來た。

「あなたが、この村の村長ですね？我々は王国の騎士団の者です。私は隊長のマダス・アンダルトといいます。最近、この辺りで盗賊達が出没するとの情報を得てこちらに來たのですが・・・間に合わなかつたようで、申し訳ない」

そう、申し訳なさそうに言つた。

「お気になさらず。偶然、立ち寄つた彼のお陰で、皆、無事でしたから」

村長さんは、別段氣にしていない、といった感じで言い僕を紹介した。

「君は？」

騎士の人は恵吾の方を向き聞いてきた。

「僕は端山 恵吾とあります」

「そうか、ケイゴ君、君のお陰で村の人達に大した怪我が無かつた。ありがとうございます」

「いえ、そういうばは盗賊達はどうするんですか？」

先程から気になっていた事を聞いてみた。

「君が捕まえてくれた奴らは牢獄行きだ。逃げた奴らや、残りの奴らはアジトが分かり次第に捕まるよ。それと、奴らがこの村を再び襲う可能性もあるから、ある程度の部隊は残しておこう。ところで君はこれからどうするんだい？」

マダスは恵吾が聞いた事の他に聞きたかった事まで教えてくれた。（どこか・・・うん、取り合えず一輝やこの世界の情報を集めたいし、大きな街、交通の便がある所に行くか・・・）

「実は友達と逸れてしまつて、出来れば大きな街に行こうと思つています」

それを聞くと、丁度良いとばかりに

「なら僕達と来るかい？僕達は報告の為に城に戻るんだが、良かつたら一緒に来ないかい？城下町なら大きいし君のお友達の事も何か分かるかもしねりないよ」

城下町か、それを聞き、そこなら情報も多く、大抵の場所に行ける、

という点から付いて行く事にした。

「それなら、お願ひ出来ますか？」

「もちろん。それじゃあ、明日の朝に出発するから準備しておいてくれ

そう言われたが、ケイゴは荷物等は持つてないのでこのままなのがだが。

「分かりました。それじゃあ、明日よろしくお願ひします」

恵吾がマダスさんと話しあると村長さんが

「なら今日は僕の家に泊りなさい」

そう言った。

「良いんですか？村長さんも大変なんじゃ・・・」

と言つたが正直ありがたい話だつた。この世界には来たばかり
お金などは持つて無かつたので嬉しい申し出だ。
例え野宿になつたとしても大丈夫だろうが、やはり
しつかりとした家で休みたかった。

「いや、構わんよ。君のお陰で皆が無事じやつたんぢや。むしろ、
これ位じや全然足りんよ」

「それでは、お言葉に甘えさせて頂きます。よりしきお願ひします」

「さあ、中に入つてくれ」

再び村長さんの自宅に着くと、そつと促した。

「おじや まします」

「あつ、お帰りなさい、お父さん」

「おじいちゃん、お帰り～」

家に入ると女人と、小さな女の子が気付いた。

「ああ、ただいま。今日はお姫さんも居るぞ」

「あら、あなたは・・・」

そう言つと、女人は僕が居る事に気付いた。

「昼間のお礼も兼ねて、今日は我が家に泊つてもうつ事にした」

「お世話を掛けます。1晩よろしくお願ひします」

「あら、そんなこと無いわ。あなたが居なかつたら今頃どつなつて
たか」

そう言われ、嬉しくなつた。僕が照れていると女の子が
恵吾の足元に来て、服の裾を軽く引っ張つて、

「お兄ちゃんが悪い人達を追い払つてくれたんでしょう？ありがとう
お礼を言つた。恵吾は、嬉しくなり

「どういたしまして。お嬢ちやん、お名前は？」

そう聞くと

「あのね、私、ディナって言ひます。お兄ちやんのお名前は？」

「僕の名前は恵吾つてこのつ。ぬりじへね。」

僕が答えると女の子は微笑んだ。

「ケイゴお兄ちやん、こっちに来て一緒に飯食べよ

「え、えっと……」

「こら、せんなに引っ張つたら、」「迷惑だしょ

「恵吾は苦笑するが

「気にしないでトセ。子供は割と好きですか？」「

「ほり、ケイゴお兄ちやんも、おじいちゃんも早く～」

そう話しつづけると、ディナに引っ張られて食卓に連れて行かれた。

「わっ、どうぞ。お口に合えば良いんですけど」

「お母さんの、」飯はすぐおいしいんだよ

見たこと無い料理ばかりだったが、食べてみると
どれもおいしかった。

「おいしです。この料理初めて食べたんですけど、すくおいしく
です」

そう言われ嬉しそうと言つていた。

「あら、お口に合つて良かつたわ」

それを村長さんは見ながら微笑み、話し掛け来た。

「明日には此処を出るんだろう？なら、今日の内に沢山食べておき
なさい」

「え～、お兄ちやん、明日には届なくなつちやうの～？」

それを聞き、ディナちゃんはつまらなそうに言つた。

「うん、お友達と逸れちゃつたから、探さないといけないんだ」

それを聞き、少し考えていたが、パッと笑顔になり

「それじゃあ、お友達が見つかったら、また来てくれる？」

そう聞かれたので僕は

「 カルビ、約束するよ」
セツ約束した。「トライナちゃんはそれを聞かないと、喜んだ。

翌日、此処を出る事に少し寂しさを感じた。

戦いの終わりと騎士の到着（後書き）

書いていてやつぱり戦闘シーンは難しかったです。もう少し、詳しく書きたいと思っていたのですが・・・。次回でこの村から出て、街でのシーンに入れます。これにより、人物や設定等が沢山出でるので、それをどうまとめようか、考えています。

恵吾の性格が少々安定していない点ですが、本編にも書いたようにテンションがあがった為に安定していない状態になってしまいました。

それでは、技紹介です。

* 1 『つばめがえし』 ポケモン 「ポケットモンスター」
今回使ったのはポケモンが使ったので、アニメを基にした
発動です。なので上空から、というのにしました。

* 2 『戦いの歌』 ネギ 「魔法先生ネギま」

肉体強化の魔法。肉体強化系としては割簡単な方。

* 3 『破裏剣舞』 双剣 「·h a c k G ·U ·」

双剣を持ち、独楽のように体を回転させて、周囲の敵を斬り付ける。

* 4 『疾風双刃』 双剣 「·h a c k G ·U ·」

双剣で敵を連続で斬り付ける双剣士としては基本の技。

* 5 「プラクテ ビギ・ナル 光の精靈11柱 集い來りて 敵を擊て 魔法の射手」 ネギ 「魔法先生ネギま」 純粹な破壊属性を持つた光属性の矢を11本を相手に放つ。1本の威力は

それ程は高くない為、複数放つのが普通。

* 6 «破道の四 白雷』 死神 「BLEACH」 指先から電撃を出し攻撃する。本来は無詠唱の場合威力は落ちるが魔力を多く込めて放つた為、威力も高い。

* 7 «デイバイン・バスター』 のは スバル 「魔法少女リカルナのはシリーズ」 直射砲撃魔法であり、ある意味、純粹な魔力攻撃とも言える。威力を高めるためチャージすると発射に時間が掛かる。

* 8 «足に魔力を込め、地面を蹴った』 ネギ 小太郎等の魔法、気を使って、ある程度のレベルに到達した者 「魔法先生ネギま」 足に魔力、または気を集中させて、それで地面を蹴る事で離れた距離にも一瞬で

近付ける。ただし、失敗して止まれないとそのまま、投げてしまう。また、

動きが直線的で読まれやすい、という欠点がある。

* 9 «無拍子』 兼一 「史上最強の弟子ケンイチ」

柔術・空手・中国拳法・ムエタイの4つの要訣をまとめて放つ突き。ノーモーションから発動できるが、威力が大きい分スキも大きい。

* 10 «渦廻斬輪蹴』 昌 「史上最強の弟子ケンイチ」

足を渦巻きのように回転させて無数の蹴りの繰り出す。

旅立ちと森での発見（前書き）

ですので、今回は文の量が少ないです。

旅立ちと森での発見

食事の後、恵吾は村長達と色々と話をした。どんな所に住んでいたか

家族はどんな人か等。恵吾は嘘がバレない程度に本当の事と混ざって話した。

話していると夜も更けてきて、ディナが母親に寝る様に言われたが、

恵吾ともつと話したいと言つて黙々を捏ねていたが、説得されて渋々諦めた。

「ケイゴ君、すまんな騒がしくて。あの子の父親、つまり儂の息子は盗賊に捕まつた、皆を助けに行って、捕まつてしまつていなんじや。じゃが、君のお陰で無事に帰つて来られた。改めて、この村を代表して礼を言つ。ありがと」

お礼を言われたが、恵吾はくすぐつたくなつた。

「いえ、気にしないで下さい。僕が好きでやつた事なので」

「どうか、じゃがお陰で助かつたのは事実じゃ」

その後も、暫く話していると流石にこれ以上起きていては明日に響く、という事で部屋に案内された。

案内された2階の部屋でベットに寝転びながら

今日1日についた事を思い出していた。

「今日は凄く濃い1日にだつたな。異世界に飛ばされたと思つたら、巨大な鳥と戦つたり、盗賊と戦つたりして・・・・。んつん～、さてと、寝るか。・・・・あつ、そつだ明日の朝、あれをやるか」

そう言つと、眠気が襲つてきて、すぐに眠りについた。

「ケイゴ君、起きてる？朝よ～」

恵吾を起にす声が聞こえてきて、少し目が覚めて

「・・・知らない天井だ」

そう呟いた。

(お～、言えた言えた。いや～、昨日の夜に思い付いたのに忘れて無かつたか。つと、んな事考へてゐる場合じやないな)

早く起きないと迷惑掛けん、そう思ひ

「はい、起きてます。すぐに行きまわ」

返事をして、1階に降りた。

「おはよ～、お兄ちゃん」

1階に降りると、ディナ来てあこせつをした。

「おはよ～、ディナちゃん」

恵吾もあこせつを返してみると

「ほら、2人共、顔を洗つてらっしゃい」

「は～い、お兄ちゃん行こ～」

母親の言葉に返事をし、恵吾を引っ張りながら洗面所に行つた。恵吾達が顔を洗い、リビングに戻ると見た事無い男の人が居た。

「やあ、おはよう。昨日はよく眠れたかい？」

誰かが分からず考へてみると

「え、ええ。お陰さまで」

後ろからティナが駆け寄り抱き付いた。

「あ～、お父さん。お帰り」

「ああ、ただいま」

どうやら父親のようだ。だが何故、昨日は居なかつたのだか、考へていた。

「さあ、畳し上がる下をこ～」

そして、食事をしながら話してみると、どうやら昨日、

他の人達と村の復興を行つていったようだ。

「そうだったんですか・・・すみません。お手伝い出来なくて」「ははっ、気にしなくて良いよ。君のお陰で誰も奴らに連れて行かれなくて済んだんだからな」

気まずそうに言つ恵吾に対して、そう言つた。

朝食が終わり、お礼を言い出で行こうとしたら、ディナに少し泣き付かれた。それでも、もう一度来ると、昨日の夜と同じように約束すると泣きやんだ。

そして、村の入口にいるマダス達と馬車に乗ろうとしていると、村の人達が何人か居た。

「えっと、これは・・・」

恵吾が戸惑つていると1人の男の人が口を開いた。

「ありがとな」「お陰で家族が無事だった」「ママを助けてくれてありがとう」「また、おいで。こちそうするよ」

1人を切つ掛けに、そこに居た全員がお礼を言つた。

「・・・これって」

「皆、ケイゴ君に感謝しているんだろう。君はこの村を救つた英雄なんだから」

マダスさんはそう言い、そこに居た人達を見渡し

「ほら、皆に何か言わないと」

そう促した。しかし、正直いつて何を言えば良いのか分からなかつたが、少し考えて

「えつと、皆さんお元氣で。また何時か会いましょう」

そう言つた。それを聞き、村の人達は大きな歓声を上げた。

「・・・」

村を出て暫く馬車に揺られて森の中を進んでいると「どうしたんだい？さつきから、ずっと黙っているが

「いえ、ちょっと寂しくて」

それで、少し気まずい空気になつたので、

「それで、城下町にはどんなのがあるんですか？」

空気を変える為に、そう聞くと

「そうだな、私達が向かうのはダルトニア街にある第2支城だ。周囲には海や川があるから商人達の間では魚介類が取引されているんだ。だから、市場も潤っているよ。ああ、それと、街では魚介類の料理が多いね。ただし、偶に漁船を狙つた海賊が出るから少し危険もあるね。その海賊船っていうのは数年前に現れたばかりでね、つと話しがズレてしまつたね。まあ、比較的平和な街だよ」

色々と教えてくれた。

（海賊か・・・盗賊といい何だか大変だな。もしかして、異変が原因なのか？）

「いいじで、休憩して昼食にしよう」

半日程、馬車に揺られていると昼食時になつた為、皆は馬車から降りて準備を始めた。

「昼食が出来るまで時間がある。この辺りを散歩してきたらどうだい？」

準備は同行していた女従、つまりメイドさんがテキパキ

としている。それを見ていると、マダスが恵吾に

そう言つたので、この付近を散歩する事にした。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

森の中を散策していると、木に幾つか実があつた。

「これ食べれるのか？ うーん、『アンサートーカー』＊1

どうやら食べられる様なので、幾つか獲つて食べていた

「おー、中々おいしいな」

そうしていると他のとは少し違う実があつた。他の色が赤く
楕円形をしているが、それは、オレンジ色で形も丸型だった。
まだ、熟していないのか、それとも病気なのか調べると、どうやら

めったに、出ず市場ではかなりの値段で取引されている物だつたそれを取り合えず、『月衣』に入れておいた。
そして、恵吾は戻つた。

戻ると準備が出来ていた。テーブルや椅子も準備が出来ていて、案内され、座るとメイドさんがシチューとパンを。出してくれた

「どうぞ」

「ありがとうございます」

その後、食事が終わり片付けも終わつた。

そして、馬車に乗り込んだ。

それから、2日程かけて恵吾達が乗つた馬車は
ダルトニア街に到着した。

途中、特に事件は何も起こりらず、騎士達とも話しの中で少しだが、親しくなつた。

「ここがダルトニアだよ。そして、あそこに見えるのが第2支城だよ」

街に入ると、賑やかな街通りと沢山の人達、そして道の奥には城があつた。家は石と木で造られた、ファンタジー系のRPG等によくある家だ。城は石で造られた灰色の大きな形である。

「は～、大きいですね」

「ああ、もつとも、首都にある本城はあれ以上だけね」

あれ以上の大きさと聞き、少々驚いていた。旅の途中に第2支城がある、という事は、

第3、4の支城があるのかと思い、聞いてみたが、ビックや、支城は2つだけのようだ。

第2支城がここに建つた理由は、海からの物が流通し、それと同時に人も増える、

そういう理由のようだ。

旅立ちと森での発見（後書き）

今回は恵吾が村から出発し、ダルトニアに着くまでの話でした。そういうた理由もあり、文の量が少なめでした。

もう少し、詳しく述いても良かつたかと思ったのですが、あまり、ダラダラ書いても面白くないかと思い、この量になりました。

技紹介

* 1 「アンサー・トーカー」 清麿 テュフォー （金色のガッシュュベル）

これは、あらゆる問い合わせに対する答えが、瞬時に分かる。といつものです。

戦いであれば、どうに当てれば効率的か、どうすれば回避出来るかが分かり、

他には機械でも、触るだけで使い方が分かり使いこなせる、等です。考える、

ではなく、思い浮かぶ、と言つ方が正しいので、知らない事でも分かる。

城と城下町（前書き）

今回、ようやく街での話に入ります。
とこつても街で何かある、とこつのは、あまつあまつません。

城と城下街にて

大きな門をくぐり、そのまま大通りの入口に着いた。

「我々はこれより、報告に向かうのだが・・・出来れば一緒に来ては貰えないだろうか？盗賊を実際に追い払つた、君が直接言つた方が分かりやすいし、もしかしたら褒賞が出るかも知れないよ」

そう言わると、恵吾には惹かれるものがある。

だが、その前に聞きたい事があつた。

「うーん、ところで、報告つて誰にするんですか？」

報告をする、という事は立場の高い人に言う、という事だ。

「ああ、それは、この街を仕切つてらつしやるフィスガブ家の現当主、ムガリウフ殿だよ。フィスガブ家は代々、この街を統治してきてね。街の人の人望も厚い方なんだ」

それだけ、聞けば良い人物に思えるが、それはあくまでも騎士としての視点なのだろう。

ならば、鵜呑みにする事は出来ない。他の立場の人、例えば一般の民達からは

どう写つているかも、重要な事である。

「・・・じゃあ、お願ひできますか？会つても見たいですし、褒賞つていうのにも興味がありますし」

素直にそう言つと、

「ははっ、そうかい。それじゃあ、もう少し待つてくれ」

そう言つて、馬車は大通りを進んだ。

「第2騎士団 団長マダス・アンダルト 盗賊討伐任務の報告に來

た。門を開けてくれ」

「「「「はっ！」」」

マダスさんが、そう言つと、城の門番の人達は中の人達に門を開ける様に伝えた。

それを聞いて、中の人人が門を開けたようだ。

ギイ——————

大きな音と共に開いた門を馬車で通り抜けると大きな庭になつて
いる。

そこでは、数十人が訓練を行つていた。

「あれは、第1騎士団の騎士達だよ。今は鍛錬の時間だからね。ち
なみに反対側の方では、魔法士達が鍛錬しているよ」

「同じ騎士団なら一緒にすれば良いんじゃ・・・」

「同じ、といつてもこちらに居るのは、剣や槍、使つたとしても魔
武器を使う人達は居るけど、純粹な魔法は使わないからね。だから
別々にしているんだよ」

「さつ、来てくれ」

城に入り、しばらく中を歩いていると廊下の先に大きな扉があつ
た。

コンコン ガチャツ

「第2騎士団 団長マダス・アンダルト入ります」

ノックをして入ると、そこには50代ぐらいで緑色の髪と鬚を生
やした

男の人が椅子に座つていた。

「話しさは聞いている。そこに居るのが、そうなのか?」

「ええ、こちらのケイゴ ハタヤマが報告した者です」

「そうか、たつた一人であれだけの盗賊を倒したのは本当か?」

「はい、事実です」

「ははつ、そうか。中々強いんだな。それに、礼儀正しい」
少し、笑いそう言つた。

「あ、いえ・・・・・」

(参つたな。こんなに緊張するとは、やっぱり僕つて、肝が小さい
な・・・)

褒められた事に照れたのと、緊張からつまく答えられなかつた。

「私達の対応が遅れた為、盗賊達の暴挙を許してしまつた。だが、

君のお陰で大した被害も無かつた。この地を任せられた者として、心から礼を言う

椅子から立ち上がり礼をした。

「部下に謝礼を用意させてある。後で、受け取つてくれ。……君はこれから、どうするつもりだい？」

「とりあえず、友達の情報を集めて合流したいと考えています。それからは・・・また2人で旅を続けようかと・・・」

「・・・その友達とは、いつ逸れたのだ？」

「えつと、5、6カ月程前です」

咄嗟に適当な期間を言った。

「なら、もしも友達が隣国のウイガレディス国に入つてしまついたら、探すのは困難となるぞ」

「へ？ 何ですか？」

「私たちの国、レンスウィートと数年前から、戦争中という事は知つているね？」

「え？ え、ええ」

まずい、とりあえず話を合わせておくか。

「以前は商人程度であれば行き来する事は出来たが、つい2カ月前に激化し、商人さえも通る事は困難になつてしまつたのだ」

ああ、なるほど。

「なるほど、だから探すのが困難つて事なんですね」

「そういう事だ」

「まあ、なんとかしてみますよ。貴重な情報ありがとうございます」
僕がお礼をすると、ムガリウフさんは手を叩き

「そうか。誰がある」

そう言つと、扉が開き布袋を持った男の人に入ってきた。

「失礼いたします」

「これが謝礼だ。受け取つてくれ」

そう言って、布袋が渡された。

「ありがとうございます」

僕がお礼を言うと

「いや、本来ならもっと出せれば良いのだが……何分、戦争中だからね、あまり出せなくてすまないね」
申し訳なさそうに言った。

「いえ、お気になさらず」

「それでは、私が外まで案内しよう。城の中は少々複雑だからね。迷つたりしたら大変だ」

「よろしくお願ひします。それでは……」

マダスさんに連れられて、部屋から出た。

「ふう、緊張した」

城を出て、僕はようやく一息つけた。

「ははっ、大変だつたね」

マダスさんの方を向き、

「それでは、僕はこれで」

僕がそう言つと、マダスさんはそう言い右手を手を出した。

「ああ、また何時か会えると良いね」

僕はその手を握り返した。

城を出てから、街を見ながらゆっくりと散策する事にした。馬車の中でも聞いたように、

街は賑わつており、道行く人々の顔は活気に満ちていた。大通りから横道に入り、

しばらく進むと、人の数は少なくなってきた。だが、それと同時に商人や子供たちの声が聞こえて来るようになつてきている。どうやら、大通りでは

馬車などの通行に使われ、裏の小さい道では商人による商品の販売や、子供たちの

遊びの場所になつてゐるようだ。売られている品を見てみると、

野菜などの

食糧は見た事の無い物ばかりだが、やはり魚介類らしき物が多く売られている。

他にお菓子等も売られていて、良い匂いがしてきてくる。

恵吾は、お腹が空こってきたので、軽く何か食べようと屋台を見ていると、

一際良い匂いのする屋台があつたので、そこを覗いてみると、魚の切り身と野菜を

交互に挟んだ、

串焼きが売っていた。

「すみません、これを2本ください」

店番をしていた女性に言つと

「あいよ。ほら、2ギルだよ」

威勢の良い声と共に串焼きを出された。恵吾は、貨幣のレートが分からなかつたので、適当に貰つた袋から一枚硬貨を出して女性に渡した。

「えつと、すみません、これで足りますか?」

出された硬貨を見て女性は

「ちよ、ちよっと多すぎるよ。こんなに出されても釣りが無いよ」

そう言つた。どうやら、金額が大き過ぎたようだ、

受けとつて貰えなかつたので、袋の中を見て、今度は違う硬貨を出した。

「あつ、すみません。えつと、それじゃあ、これで良いですか?」

「ああ、10ギルだね・・・」

今度は良かつたようで、受け取つてもらえた。

「すみません。ついでに、この辺りに宿つてありますか?」

まだ、日は高いが暮れる頃になつてから、見つからなかつた、では大変なので

日が高いうちに探ししておいたり、考えたのだ。

「あんた、旅の人かい？」

「ええ、今日この街に着いたんですけど、まだ宿が見つかって無くて」

そう言つと、女性は来た道とは逆を指して

「それだったら、ここを少し行つた所に『アトナ』って宿があるよ

「そうですか、ありがとうございます」

それを聞き、すぐにその方向に行つた。

「あ、ちょっと、釣りを忘れてるよ」

「それは、宿を教えてくれた、お礼です」

そう返答すると、女性は少しポカンとしたが、

「ははっ、あんた気前が良いね」

笑い、恵吾を見送つた。

しばらく『アンサーティーカー』で文字を翻訳しながら歩いている

と、『アトナ』という店があつた。

店のドアを開けると、1階では食事も出しているようで、何人かが食事をしていた。恵吾はそのまま、奥のカウンターに行くと、10代前半で赤い髪を肩まで伸ばして、快活そうな女子がいた。

「いらっしゃいませ。どんな御用ですか？」

「しばらくここに泊まりたいんだけど、部屋は空いてるかい？」

「はい、大丈夫です。ちょっと待つてください」

カウンターの下から帳簿とペンを出して

「ここにお名前を書いてください」

そう言われ、名前を書くとカウンターの奥にある部屋に入つた。

「どうぞ、これが鍵です。部屋は階段を上つて左に行つた1番奥の

部屋です」

戻つて來ると、右手には鍵が握られており、それを渡された。

「ありがとう、えつと・・・」

「あつ、私ナナつて言います」

「そう言い、階段を上り2階に上がった。そして、言われた通り左の1番奥の部屋に鍵を開けて入った。

部屋の中にはベッドが1つと、テーブルが1つにイスが2つあるだけの簡素な部屋だった。恵吾はベッドの上に倒れこんだ。

「あ～、気持ちいい～、最近はテントでの睡眠だったからなあ」

そのまま、しばらく起きなかつたが、起き上がり部屋を出た。

「あつ、お出かけですか？」

「うん、そうだよ。あつ、そうだ、この鍵つてどうすれば良いの?」「でしたら、私に預けてください」

鍵をナナに預けて宿を出た。

一旦、大通りの方に出て、街の散策を続けていると、城からかなり離れた所に気になる建物があった。看板の文字を読んでみると「ギルド 案内所」と書いてあつた。「ギルド」の文字に惹かれて、扉を開けた。

開けて中に入った。中には壁には何か書いてある紙が大量に貼つてあり

それを、見ている人が何人も居る。他には何人かで談笑したりしている人も

居れば、カウンターの女性に話し掛けている人も居た。カウンターに近付き、話を聞くことにした。

「いらっしゃいませ、ギルド案内所は初めてですか？」

そう聞かれ、

「え、ええ。それで、ギルドがどうこう所か聞きたくて・・・」

答えると、

「分かりました。それでは、説明いたしますね」

「お願ひします」

女性は説明を始めた。

「ギルドとは、元々は自警団が始まりなのです。国の騎士達が、すぐに対応できない小さな村や町を守る為、動いていたのですが、少しづつ人数が増え

ていき今ではかなりの数が存在しています。それと同時に、守る為だけでは無く自分達では

行えない事を代わりに賃金を払って行つてもうづ、といづのも増えました。

ただ、国の騎士が在住しているような街にはあまりありません。何故なら、

何かあれば騎士達が解決してくれるので、お金を払つてまで頼む人は少ないからです。

ですが、中には騎士には頼めないような内容もあります。個人的な理由のもの、

例えば、個人商人方の移動、薬草や料理の材料の調達等の場合です。ここまでは、よろしいですか？」

なんとか、ついていけていたので

「はい、なんとか」

そう答えた。

「次にランクについてお話しします。ランクは上からS、AAA、A A、A、B、C、D、E

の8段階です。ランクにより受ける事の出来るクエストが変わります。

そして、AAランク以上でマスター権利が発生します。マスター権利とは自分のギルドを作り、そこ責任者になる、というものです。ただし、マスターになるには

一定以上の資産を持つており、ギルド本部の承認を得なければなり

ません。

そして、ギルドを立てる場合は立てる町、もしくは村に他のギルドが存在してはいけません。こういったギルドを個人ギルドといい、直接依頼人から依頼を

受ける事ができます。ギルドに新しい人間を入れる時は、ギルド本部に加入する

人物の情報を送ってください。それと、ギルドの規模に合わせて毎年ある程度の

金額を送金するようになります。以上がギルドの説明になります。

御用はギルドへの登録ですか？ それとも、御依頼ですか？

「ギルドへの登録をお願いします」

そう言つと、奥から用紙を持って来て、

「はい、それではお名前をこちらにお願いします」

名前を書き、用紙を返すと

「では、こちらの部屋へどうぞ。こちらで、写真を撮ります
奥の部屋へと案内された。

城と城下街にて（後書き）

後半はギルドの説明で終わってしまいました。

少し分かりにくかつたでしょうか？

イメージとしては街にある、誰でも受けられるクエストがあるのが、モンハンのギルドで、個人のが FAIRY TAIL のギルドといった感じです。

登録と初クエスト

奥の部屋に入ると、4つの足が付いた20センチ四方の木の箱があつた。

恵吾はこれが何かわからず、戸惑っていたが女性に

「では、この前に立つてください」

言われた所に立つていると、

「それでは、撮りますよ」

その言葉から、目の前にある物がどうやら、カメラのような物で、それを使い登録に必要となる顔写真を撮るようだ。

「はい、良いですよ」

パシャヤツ

光と共に音が出た。

どうやら、本当にカメラのような物らしく、光も音も写真を撮った時と同じだった。

「それでは、しばらく中でお待ちください。出来ましたらお呼びします」

そう言われ部屋から出ると、呼ばれるまでの間、壁に貼つてあるクエストを見ていた。

「えつと、『隣町までの護衛をお願いします』『マンル工草を見つけて下さい』

・・・へえ、色んなのがあるなあ」

クエストを見てみると、薬草や肉類等の採取系から商人等を守る護衛系、

危険な獣等を退治する討伐系まで様々な無いようだつた。紙には他に報酬や

依頼人の名前が書いてあつた。そして、紙の左上にはじやり等のおそらくクエストのランクと思われるのが書いてある。

他の人を見ていると、屈強そうな男が採取クエストを選んでいたり

軽装の女の子が討伐系を選んでいたり、と見た目とクエストの内容に

ギャップがあり、驚きや面白さがあった。

それらを、しばらく見ていると

「ケイゴさん、登録の準備が出来ましたカウンターまで来て下さい」
呼ばれたので、カウンターに行き

「名前はケイゴ ハタヤマ 男性 20歳でよろしくですね？」

「はい、間違ひありません」

差し出されたカードに間違ひが無いのを確認して受け取った。

「それでは、登録いたします。・・・・・・はい、登録が完了いたしました。

これで、クエストを受けられます。但し、あなたのランクは1番下のEランクです。

クエストを受けられる時は、壁に貼つてある用紙を持つて来て下さい。

それで、受注出来ます。クエストが終了したら、ギルドに行き終了確認をしてください。

そして、カードを提出し、カードに完了を記録します。紛失したり破損した場合は

再発行できますがその際には、30ギルが必要ですのでお気をつけください。

それでは、クエストのランクについて詳しく説明いたしますね。まず、あなたが受ける

事が出来るクエストはEと1つ上のロランクまでです。

それと、チームを組んでいる場合は1番ランクの低い人に合わせる事になります。

それと、SJAのクエストは自分のランク以上は受けられません。ランクの上昇方法は

自分と同じランクのクエストを15と1つ上のクエストを5つ成功すれば上がります。

ただし、A A以降についてはマスター権利もありますので、ギルド本部が定めた

クエスト、及び試験をクリアする必要があります。それと、個人ギルドでのランクについてですが、基本的にギルドが定めたものと同じなのが多いですが、中にはそのギルド

独自のものもあります

「そう言い、一旦区切ると恵吾の方を見て

「他に質問はありませんか？無ければ、これで説明を終わらせて頂きます」

「はい、大丈夫です」

今まで聞いた中には特に問題は無かつたので、恵吾はそう答えた。

「それでは、お気をつけて」

女性はお辞儀をするとそう言った。恵吾はカウンターを離れ、壁に貼つてあるクエストを見てみた。

「さてと、何にするかな・・・おつ、Eランクの『ガンヒュ』の実を10個探してきて下さい』か。場所は、街を出て近くにある森か。これなら簡単そうだし、これにするか」

どういうのにしようか、迷っていたがその中に割と簡単そうなクエストがあつたので、それを受ける事にした。恵吾は壁に貼つてある紙を取つて

「あの、すみません。このクエストを受けたいのですが」

そう言い、カウンターに居た、先程とは違う女性に受けたい旨を伝えた。

「はい、分かりました。こちらは期間は明日までです。実はこちらに持つて来て下さい。それと、明日までであれば何度かに分けて持つて来ても構いません」

クエストの補足説明を受けた後、その紙の控えを貰い案内所から出た。

そして、これからどうするか考えて

「さてと、『月衣』に入れても良いけど、魔法の説明が面倒だしリュックとかは必要だな」

そう決めるとゲームの経験から、欲しい物はおそらく雑貨屋に売つている

と判断し雑貨屋を探す事にした。

しばらく歩いていると雑貨屋を見つけ、扉を開けて店に入ると中には中年の男がいた。

「いらっしゃ、何をお求めで?」

「えっと、リュックを一つ下さい。それと、地図ってありますか?」「リュックだつたら、そここの棚にあるよ。地図はちょっと待つてな」と言い、リュックや鞄等が積まれている棚を指差した後店の奥に入り少しすると3つの地図を持ってきた。

「ほら、この辺りの地図と街の地図、これがこの周辺の町や村の位置が書いてある

地図だ。地図によつて値段が違つが、どれが良い?」

今はクエストの内容上、周囲の地図が欲しかつたので、それを指し、

飾つてあつたリュックを一つ持つてきた。

「それじゃあ、この辺りの地図を下さ。それと、このリュックも

「あいよ、じゃあ合計で35ギルだ」

「えつと、これ4枚でいいですか?」

「40ギルか、なら釣りの5ギルだ。他に何か欲しい物はないか?家は色々あるぜ」

考えてみたが、特に必要無かつたので

「うん、今は特に無いので、またそのうち」「元気ひき」
そう言つて、店を出た。

「えつと、地図によると街を出であつちか・・・」

門を通り、外に出て地図を確認し目的地である森がある方向を確かめた。

しばらく歩くと、地図通り森があつた。森に入ると木を見ながらガンヒュの実を探していたが、中々見付からず、10個を見付けたのに

かなり時間が経ってしまった。

「・・・・これで10個、と。結構大変だったな。でもまあ、10個見付かっただし

街に戻るか」

目的を達成し街に帰ろうとしていた時、近くの木に下に倒れているメイド服の女の子と木の実が入った籠が落ちていた。

「ん？あれは・・・って、大変だ」

初めは倒れているだけ、と思っていたが近付いてみると

女の子は頭から、血を流して体にも擦り傷があった。

「大丈夫ですか！ 意識はありますか？」

近付き呼び掛けてみるが反応せず、グッタリしている。恵吾は危険と感じ、

「まずい『サイフォジオ』*1 どりやつ」

ピンク色の大きな剣を出し、それを刺した。剣が光ると上部に付いている

羽が回り出すと傷が少しづつ治つていき、しばらぐすると怪我は完全に消えた。

「あのっ、大丈夫ですか？」

目が少し開いたのを確認すると、そう尋ねてみた。

女の子は起き上がったが

「・・・え？ええ。えっと、私はいったい・・・」

自分に起こった事が理解できてもうらず、戸惑つていいようだ。

恵吾はゆっくりとした声で

「あなたは、ここで倒れてたんですよ」

そう言うと、女の子は自分の周り、それと恵吾の方を向き

今の状況を理解し始め、気を失う前の事を思い出した。

「確かに『レスフィの実』を採取中に木から落ちて氣絶したんだわ」「そうだったんですか、ははっ、びっくりしましたよ、女の子が倒れて血も

出てて・・・」

「血が?..」

女の子はそれを聞き、慌てて体や頭に触れてみるが、血は付いているものの

何處にも痛みは無く、出血も何處にも無かつた。

不思議がつっていたので、

「ああ、それだったら僕が治しましたよ

恵吾がそう言つと、驚いたがすぐに安心したように息をつき恵吾の方を向き

「ありがとうございます。あなたは魔法士ですか?」「

礼を言い、お辞儀をした後、質問をしてきたので答えた。

「うん、まあね、クエスト来ていって。あなたは、なんでその木の実を?」

何となく気になつた恵吾がそつやつて聞くと

「私はお仕事で來たんです。私はお城に仕えているんです」

それを聞き、恵吾は女の子がメイド服を着てている訳も分かり納得した。

「へえ~、お城のメイドさんつてそんな事もするんだ」

恵吾が呟き考へていると、女の子は

「くすり、それでは私はこれで、ありがとうございます」

小さく笑い、再びお礼を言つと、近くに落ちていた籠を拾い上げ街の方に歩いていった。

「あつ、いえ。それでは」

恵吾は女の子が見えなくなるまで、歩いて行つた方を見ていた。

「つと、僕も早く戻らないと日が完全に暮れる」

既に、日は落ちかけていて森も暗くなり

虫や動物たちの声も聞こえなくなり始めていた。これ以上ここに居ると迷いかねない状況なので、そのまま、街へと戻り報告に行く事にした。

街に戻った恵吾はすぐに案内所まで行つた。途中、街の様子を見ていたが

遊んでいた子供達の声は聞こえなくなり、大通りも人通りが少なくなつてきている。

案内所に入ると、ここも人の数が少なくなつてきており、昼間の半分以下

の人数しかいなかつた。カウンターに行きクエストを終えた事を報告し、

リュックから【ガンヒュの実】を取り出し、それを渡した。

「確認しました。【ガンヒュの実】10個【納品されました】のでクエストは

クリアとなります。それでは、ギルドカードをお出しちゃい」

カードを出すと、何かにかざすと

「カードに登録いたしました。お返しいたします」

受け取り、今日はこれで終わりにするつもりなので、案内所を出て宿に戻つた。

「いらっしゃ、あ、お帰りなさい」

宿に入ると忙しそうに働いているナナが気が付き言つた。

宿に着いた時には、日も暮れており晩飯時なのか、多くの人達が食事をしながら騒いでいた。その人達の間を縫い開いている席に着くと、しばらくしてナナが来た。

「お帰りなさい、どこに行つてたんですか？」

「ちょっと、クエストで街の外にね」

「ケイゴさんつてギルドに所属してたんですか？」

「今日なつたばかりの新米なんだけどね。つと、それで注文なんだ

けど、これとこれ大丈夫?」

「はい、では少し待つてください」

恵吾はテーブルの上にあつた注文票に書いてあるのを読み、
2つ指し、聞くと大丈夫だったようでナナはそう言い、厨房の方に
注文を届けに行つた。

待つている間、暇だつたので、どうしようか考えていると

「・・・だな。だけどそれって危険じゃないか?」

「まあ、多少は危険だが大丈夫さ。このクラスの奴らも一緒なんだ。
海賊なんて問題ないさ」

「ちえつ、俺が泳げればな・・・」

(海賊か・・・そう言えば、最近出るつて言つてたな。僕も行って
みたいけど

多分DとかCランクのクエストなんだろうな)

聞いた内容から考えると、マダスから聞いた海賊を討伐、もしく
は捕まえる

という内容のクエストだと判断した。しかし、それは妙だつた。
ギルドにクエストは

城に頼めない、私的なものだと聞いた、海賊なら城に直接頼めば
やつてくれそうなモノ。変だと思つてると

「お待たせしました」

ナナが料理を運んできた。恵吾は考えるのを止めて料理を食べる
事にした。

登録と初クエスト（後書き）

今回、ギルドに登録してクエストを行つ話でした。
話はやっぱり難しいです。

それと、色々なフラグを立てたり立つたり、大変でした。
展開をもう少し早く出来れば良いのですが・・・。

技紹介

* 1 「サイフォジオ」 テイオ （金色のガッシュュベル）
回復系の呪文で、剣を刺した対象の傷を治し心の力（魔力）も
少し回復させる事ができる。対象を貫く事で、その後ろに居る
者も回復させれる。

始めての運搬クエスト

食事が終わり、代金を払った恵吾はナナから鍵を受け取り部屋に戻った。

恵吾はこれから的事について考えていた。

手元に今あるのは褒賞で貰った金額と先程のクエストの報酬だけであるが、

それでも金額的には、それなりにある。だが、こここの宿泊費や飲食代、そういうモノには毎日掛かる。

クエストの報酬は現段階では多くない。そうなれば、その内に足りなく

なり生活も儘ならなくなってしまう。となれば、早い段階でランクを上げるか、何かを売つてお金に変える必要がある。

今あるのは森で見付けた珍しい木の実、それと倒した鳥の部位をモンハンのように剥ぎ取つて、売るのも一つの手、そう考えていた。

(明日、ギルドで鳥の事も聞いておくか・・・)

眠くなってきたので寝ようと思つたが、昼間に汗をかいたりして汚れたりしているのでお風呂に入りたかったが、聞いた話ではこの世界には

お風呂は存在しているが、それは銭湯のような場所であり今の時間帯には既にやつていないので、行く事もできない。なので、恵吾は『清めの炎』*1を使つと、淡い炎が体を覆つと恵吾の体の汚れは消えていった。

服は予備を持っていなかつたので『投影』*2を使い、服を作るとそれに着替えた。

着替えが終わると、ベッドに寝転び布団を被り眠りについた。

次の日、朝になつたので起き、1階に行くと人はあまり居らず、カウンターには女性が1人居た。

「えっと、おはようございます・・・」

恵吾があいさつをすると、恵吾に気付いたよつで「ああ、おはよう。あんたは・・・もしかして、昨日から泊まってるギルドの人かい?」

「え、ええ。でも何で・・・」

今、会つたばかりなのに何故知つているのか気になつた。

「ナナから聞いたんだよ。昨日、泊まつたお客がギルドに所属してる、

つてね。それでさ。 つと自己紹介がまだだつたね。あたしは、ナナの

母親のヒルカ、よろしくね

それを聞き納得した。

「そうだつたんですか。 エット、まだ食事の注文つて大丈夫ですか?」

「ああ、大丈夫だよ。 でも、あんた随分とゆっくりなんだね。普通は早く起きてクエストに行くが、良いクエストを予約しておくん

なんだけどね」

その事は知らなかつたが、少し難しく思つた。

「・・・ははつ、そなんですけど、僕つてあんまり朝が強くないので」

「すみません、それじゃあ、これとこれをお願いします、空いていたいた席に座り注文をすると、

「あいよ、ちょっと待つてな」

そう言い、奥にある厨房のに入つていつた。

恵吾は待つ間に今日の予定について考えていた。まずは、鳥につ

いての

事、あの鳥の名前や、どういづ扱いなのか。他にも短時間で終わるクエストを

探しで済まして、早くランクを上げる予定だ。

暫くして、料理が運ばれてきたので、食べる事にした。

食事が終えて、料金を払うと部屋の鍵を預け、ギルドに出かけた。街は昨日と同じように人で溢れていた。ただ、その中で少し武器を持っていたり、杖の様な物を持った人達が多く見えた。恵吾は昨日とは時間帯が違うからだけかと思っていた。

ギルドの扉を開けると、

「こっちも頼む、早くしてくれ」「これは、まだ大丈夫か?」「早くしてくれ、間に合わなくなる」

ギルドの中は、何やら騒然としており、ほぼ全員が慌ただしく動き回っている。カウンターも同様に、受付の人達が次々と持つて来られる

クエスト用紙の登録に時間が掛かっている。

恵吾は近くに立っていた30代頃の男の人には

「あの、何かあつたんですか?」

「ん?ああ、何だか、今朝になつてクエストが大量に発注されてな。おまけに、ランクの割に報酬がかなり良くてな。それで、皆急いでるんだ」

聞いてみると、そう教えてくれた。

「へえ~、ここでは、そんな事がよくあるんですか?」

「まさかっ、こんな事は俺の知る限りじや初めてだ。だから、皆慌ててやつてるんだ。こんなのは2度と無いかもしけないからね」

恵吾はそれを聞き考えてみたが、何も思い付かなかつた。

基本的に恵吾は頭が良い方ではなく、難しい事を考えるのは得意では無い。

そのまま、暫く待つていたが収まる気配は無いので、諦めるのも

1つの手だつたが、恵吾は折角来たのだから何か1つ位はクエストを行いたいと考え、壁にあるのを何とか見ようとしたが

人が多く居る所為で中々見る事が出来ないでいる。少しすると前に僅かに進めるようになつたので、そのまま進んでようやく壁際まで

到着した。しかし、それからもクエストを見ようにも他の人が邪魔で見る事ができない状態だ。とりあえず、今のランクで受けられるのを適当に取ると、人混みの中から必死に出ると人の少ない所で

自分が取つたクエストを見てみた。

『ブリエスまで、荷物を運んでほしい』

というものだつた。これをカウンターまで出さなければならぬがこれもまた、大変だつた人混みの中を再び進み、何とか着いた。

「すみません、これを受けたいんですけど・・・」

人に揉まれ苦しくなりながらも受け付けの人に言つと、受付の人も疲れているようだつた。

「はい、えつと、これでしたら今日の昼ですので、もうじき出発です。それと、もう一人いらっしゃるので、お2人で行つて頂きます。よろしいですか？」

「大丈夫です」

「では、街の入り口の門に言つて下さい。そこで、係りの者が荷物をお渡ししますので、こちらの控えをお見せください。よろしくお願いします」

やつとの事で、登録したもののクエストの時間まで、あまり時間が無いので

裏道にある、屋台を見付け食事を終えた。そして、門まで行くと

昨日

以上に人通りが多かつた。ギルドの人を探そうとしたが、門の近くに大小様々な荷物を持つた人達と、さらにその周りに何人かの人達が居た。

その人達の周りに居る人達が紙を見せて荷物を受け取っていたのもしかして、と思い近付いてみると、その人達が見せていたのはクエストの控えの紙だった。

どうやら、ここで荷物を受け取るようだ。それが分かつたので、

恵吾は並び

順番を待つと

「すみません、このクエストのは、どれですか？」

「ん？ああ、ちょっと待つてね。・・・・・これは、あそこに行つてね。先に来た人

が待つてるから、その人と一緒にこれを出して出発してくれ」

そう言わされたので、その場所に行くと他にも何人か同じように待つており

誰が一緒の人かよく分からなかつた。どうやら、この辺りは荷物等を運ぶ

クエストを受けた人達が集められているようだ。

他の人は自分と同じクエストの人か聞いているので、同じように聞こうと思つた矢先

「なあ、あなたのクエストってこれか？」

いつの間にか、近くに来ていた男が聞いて自分のを見せてきたが恵吾のとは違つたので、それを伝えると「そうか」と一言だけ言うと、ほかの人に聞きに行つた。恵吾が再び誰かに話しかけようとした時、

「あなたのクエストはこれ？」

少しこの声で後ろから話しかけられた。後ろを振り向くと恵吾よりも頭一つ分ほど低い身長で白い髪を肩まで伸ばしており動きやすそうで青色を主体とし、黒色が所々にある服装の

少女が居た。

「あ、え、えっと、うん、確かに、これだよ」

「そう、なら荷物を受け取つて出発しましょ」

「そう言つと、少女は荷物場に進んで行つた。恵吾もハツとして慌てて

後を追いかけた。指定の場所で荷物を受け取り出発する事となつた。

荷物は縦が2メートル、横が1メートルはあるそれなりに大きい物だつた。

「これ、どうする?」「

「あ、ああ。それだつたら僕が持つて行きますよ」

「重いけど大丈夫?」

「だ、大丈夫です。僕、力持ちですから」

「そう言い、2人は出発した。

「私は、フィーナ・ディアウェル。あなたは?」

自己紹介されたが恵吾の精神は今、混乱と困惑、それと極度の緊張の

中にいた。何故なら、

(少し話しただけ、だけど間違い無い。あの子・・・クーデレタ
イプだ!)

一緒に行く事となつた少女が恵吾のタイプだつたからだ。

恵吾は元々女の子に縁が無かつた。それが、自分のタイプの子が目の前に

現れたら、動搖するのも仕方が無かつた。

「?・?・?どうしたの?」

「あつ、いえ、何でもないです。僕は恵吾 端山つて言います
自己紹介すると、フィーナは前を向き、進みだした。

始めての運搬クエスト（後書き）

今回から少しづつ物語は動きだします。

それと、そろそろ主人公や他のキャラの設定でも書こうかと思います。

技・能力

* 1 「清めの炎」 フレイムヘイズ達（灼眼のシャナ）
体の汚れを落としたり、自分の体内の毒を消す効果もある。

* 2 「投影」 士郎 アーチャー (Fate/stay
night)

自分のイメージを元に、一時的に物体を作り出す魔術。
但し、これは使用者観にある2名の場合はいつまでも消えない
というのを使っている為、消える事は無い。

キャラ設定？

キャラクター紹介

?名前 ? 性別 ? 能力 ? 立場 ? 年齢

? 性格や備考

今回は主人公の恵吾と設定上はもう1人の主人公である一輝を紹介します。

? 端山 恵吾 ハタヤマ ケイゴ ?男 ?様々な物語に登場する技・能力・体质を使
用できる

? ギルドのEランク ? 20歳

? 神と名乗るおっさん（おっさんじゃ無いわよつー）・・・存在
によつて

異世界に飛ばされた主人公。アニメや漫画、ライトノベルが好
き。

ネット小説でもファンタジー系をよく読む。なので、技や能力
に関しては

それなりに知識がある。

真面目で数学が得意だが、語学がかなり苦手。

大人しく、喧嘩等の争い事はあまり好きではないが、テンショ
ンが上がると

騒がしくなつたり、好戦的になる。

クーデレキャラや大人しいキャラが好き。

? 森田 モリタ 一輝 カズキ ? 男 ? 様々な物語に登場する武器・アイテムを取り出し使用する事ができる。

? 現在不明 ? 20歳

? 恵吾と同じく異世界に飛ばされた。趣味は似ているが一輝はライトノベルや

アクション系のゲームの方が好き。なので、アイテムや武器は恵吾よりも

多く知っている。

勉強は基本的に苦手だが、ライトノベルのお陰で漢字や文章の読み解力は優秀。

気難しく、自分が好意を持つ相手以外には、あまり愛想が良くない。

短期で時折、暴走する。気にいった作品は何度も見たり読んだりする。

ツンデレキャラや元気つ子キャラが好き。

2人が知り合ったのは、高校の時で同じクラスになり、趣味が同じだったのが切っ掛けで話すようになり、仲良くなつた。お互いに良いと思つた作品を教え合う等もしている。

お互いの好みのキャラは、ほぼ真逆だが、その事で争つたりしない。

旅の仲間と危険な道行（前書き）

お久しぶりです。

更新が遅くなつてしまつてすみません。

もう少し、早くしたかったのですが・・・・・。

今回は戦闘で技を沢山だしきり、大変なことになつてしまひました。

旅の仲間と危険な道行

街を出て移動する際には基本的に馬や馬車を使用するのだが、クエストの場合は

依頼人が用意、もしくはギルドが必要と判断した場合のみ無料で使用する事が

出来るのだが、それ以外では実費で借りる必要がある。だが、このランクの

クエストの報酬を考えると、借り費の方が多く掛かってしまうので、

借りるのが普通である。なので今、恵吾は女の子とたった2人で居るのだ。はつきり言つてどうにもこうにも戸惑っていた。

出発前に聞いた話では、これを届ける町まで歩いて4日は掛かる場所らしいのだ。

「どうしよう・・・」

恵吾はこれから先の事を考え、頭を悩ませていた。自分のタイプの女の子に

会えたのは、正直嬉しい。しかし、唯でさえ女性に免疫が無いのにこんな状況になってしまい、嬉しいやら困ったやら・・・。

「荷物、重くない?」

今まで黙々と前を歩いていたフイーナが話しかけてきた。

「えっ?! え、ええ。大丈夫です」

自分よりも後ろを歩いている、恵吾が疲れたから遅れていると思ったのか、そう聞いてきたようだ。

「・・・・・そう」

そう言つと再び前を向き、歩き始めた。

そのまま、暫く歩いていると、日も暮れ始めて辺りは暗くなりつ
つあつた。

「そろそろ、休む?」

「へっ!? え、ええ。そうですね」

恵吾がそう言つと、フイーナは手に持つてた杖を地面に置き、
肩に掛けていた鞄の中から小さい袋を出し、中から黒い塊を
出して、食べようとしていた。

「あの、それは?」

恵吾がそう聞くと、開けていた口を閉じ

「携帶用の食糧」

そう言つた。

「あの、僕が何か作りましょうか?」

「・・・出来るの?」

「はい、簡単な物ですけど」

暫く考えていたが

「・・・・・（ノク）」

頷くとフイーナは座つたので、その場に荷物を置き森の中に
食材探しに行つた。キノコや木の実等を探し、毒が無いかを調べ
問題無ければ、それを集めた。それから大した時間も掛からず十
分な

量が手に入った。それと『投影』を使い、鍋や包丁等の調理器具
を作つた。

恵吾は荷物の所に戻るとフイーナがこちらに気が付いた。

「・・・それ、どこから持つてきたの?」

恵吾が持つていた調理器具を見て、そう呟いた。

「えっと、作りました」

「? どうやって?」

そう聞かれたので答えて、

「こう、トレイス・オン 投影開始」

『投影』を使い皿を出した。

「……知らない魔法」

行き成り現れた事に驚き、呟いた。

「え？ ……あつ、……」

何気なしに使つたが、こいついた魔法は無いのか、フイーナの言葉を聞き

失敗したか、と思つてフイーナの方を見てみると、

「・・・・・」

何も言わず暫く見てから、その場に座つた。

「・・・・・あつ、そうだつた、料理料理」

そう言い、恵吾は包丁を取り出すと探つてきた食材を切り

「『プラクテ・ビギ・ナル アールデスカット』*1」

集めてきた薪に火をつけ鍋で炒めて、水を注ぎ入れて煮込んだ。

調理については料理の得意なキャラの料理能力を使つた。

『例えば、某正義の味方とか、ヤンデレで空鍋とか』

暫くすると、良い匂いが漂ってきた。恵吾が気が付くと、フイーナも匂いに

釣られたのか近くに来て鍋の中を覗いていた。

「・・・・・」

恵吾がその様子を見ていると、その事に気付いたフイーナは

「？ 何？」

そう言い、首を傾げた。

「つ！ な、何でもない・・・」

恵吾が慌ててそう言つと、興味を無くしたのかフイーナは再び鍋の中を見始めた。

そのまま、暫く煮込んでいると完成したので恵吾はお玉を使い皿に注いだ。

「どうぞ、熱いから気を付けて」

フイーナは皿を受け取ると、スプーンですくい一口飲んだ。

「おいしー」

それを聞き、恵吾は安心した。

その後、食事は進み鍋の中は空になった。その殆どがフイーナによるものだが……。

食事を終えた後、鍋等の調理器具は洗い『月衣』に仕舞つた。それを、フイーナは興味深そうにジッと見ていた。仕舞い終えた恵吾は

「えっと、荷物は見張つておくから眠つてて良いよ」

「（口ク）・・・暫くしたら交代」

そう言い、木にもたれ目を瞑り眠りに入った。恵吾は近くにあつた木の枝を焚火に

足しながら、消えないようにしていた。

そのまま、数時間が経過した頃

「（ムク）・・・」

眠っていたフイーナは目を覚まし立ち上がった。

「まだ眠つても良いよ。僕だったら大丈夫だよ」

「（フルフル）違う、敵」

「え？」

首を振り、そう言つと周囲を見渡すと

「囮まれている。迂闊だった」

『白眼』で確認すると、確かに複数の人間に囮まれていた。

（人数は1、2、3・・・15人か）

「戦える？」

「大丈夫、いけるよ」

戦闘態勢をとっているフイーナに聞かれて恵吾は答えた。周りを警戒しつつ荷物にも気を配っているフイーナを真似て恵吾も同じように警戒していると

ドドドッ！

地面から石の槍が恵吾とフィーナ目掛けて発射された。

だが、恵吾は既に発動していた『支配眼』*2により自分に向かっていた物は

全て回避し、フィーナに向かつていた物はフィーナと石の槍の間に入り

全てを手と足を使い弾き飛ばした。

「つ！ 早い・・・」

フィーナが呟くが、恵吾には聞こえていなかつた。周囲を警戒していると

「ウツ！」

火球が幾つも飛んできた。

「『セウシル』*3 姿を見せろ」

2人と荷物をまとめて守ると、周囲に居る人に向けてそう叫んだ。

『白眼』で確認してみると敵が少しづつ近付いて来ていた。

「気を付けて、少しづつ近付いて来てるよ」

「（口ク）」

恵吾に言われ頷いて構えていると

「子供が2人と侮つていたが、中々強いな」

森の方から声が聞こえてきた。声は男のそれも、かなり歳のいつている

人間のものだつた。

「荷物を置いていけ。そうすれば命は助けてやる」

荷物を狙つている、という事は先程の動きを見て殺すには手間が掛かるから荷物だけでも頂こう、そう考えていたが

「それは断らせてもらいます」

恵吾の一言によつて、無駄となつた。

「そうかい。なら、死んでもらうぞ」

それと共に、周囲から石や氷、様々な槍や刺が飛んできた。

恵吾が消そうとすると、横からフイーナが杖を構え

「逆巻け 守れ ディウインナ」」

詠唱を行うと、周囲の風が渦を巻き2人を守った。

恵吾が感心していると、敵の攻撃が止み風も消えた。風が消えると同時に恵吾は『速』で

森の中に入り攻撃をする事にした。本当は大規模攻撃を行おうと思つたが、

周囲に木々がある所為で下手をすれば周囲を火の海にしかねないので、攻撃方法を近接系にする事にした。

「ぶつ飛ベ『ゴウ・バウレン』*4」

「があつ！」

「なつ、ぶふあ」

森に居た敵を見付けると一瞬で近くに行き、強化した拳で殴り近くに居た

もう1人にぶつけた。

それを目視できた数人は息を飲み恐怖を覚えた。

「何をしている、攻撃の手を休めるな！」

「つ！－」

その声を聞き、茫然としていた他の数人は冷静になり攻撃を開始した。

「穿て グデュス」」

詠唱が聞こえると、左右から石の槍が飛んできた。どうやら先程の攻撃と同じ物のようだが、恵吾はそれを認識すると腕を左右に広げ

「『リオル・レイス』*5

黒い螺旋状のエネルギーが放出され、石の槍を消し去った。だが、それと同時に真上から電撃と氷の刺が降ってきた。

「早い！ え、えつと、こういう時は・・・」

恵吾は早い展開に焦り混乱していた。いくら能力を得たとしても

実際の戦闘経験に

関しては素人、咄嗟の事に対応しきれていなかつた。

電撃と氷は恵吾に直撃するかと思われた。だが、それは先程まで恵吾が居た場所からの

竜巻によつて恵吾に当たる事は無く防がれた。竜巻が来た方を見ると、フィーナが杖を

こちらに向けていた。どうやら、フィーナの援護だつたようだ。

「（口ク）」

どうやら援護は任せろ、といつ事らしい。それを見て安心した恵吾は木の間を抜け

走り倒していった。何度も敵の攻撃が当たりそうになつたが、それは全てフィーナの

魔法によって消された。

そして、他の敵は倒しつくし残りが1人になつた。その1人を探そうとしたが

探すまでも無く、恵吾達の前に堂々と姿を現した。男は鎧を身に纏い

厳つい顔をしていた。

「仲間は全て倒しました。残つているのはあなただけです。降参してください」

「断る。その程度の奴らがやられたからといって、どうとこう事はない。それに、俺をそいつらと一緒にするな、よつ」

そう言い、男は突つ込んできた。

「・・・・・！」

2人は驚いたが、すぐに恵吾も突つ込んだ。

「粉砕しろ 剣腕 ゴルディス」うらあーっ！

詠唱と共に両腕に岩が付き大きな拳になり、それで殴り掛かつてきた。

「『支配眼』 そんなのに当たるか

すぐに回避すると

「小さく前ならえ『無拍子』」「

「がふつ」

ギリギリまで接近し拳を腹に叩きこんだ。

「よし・・・ぐつ」

だが『支配眼』の副作用によつて体に痛みが走り、惠吾は膝をついた。

相手はそれを見逃さず、殴り掛かつてきたが、

「打ち抜け 不可視の剣 フェンティリア」

「ぐつ、うつとおしい」

フィーナが放つた風の剣によつて防がれた。それに怒りフィーナに向かつていつたが

「『ギガノ・レイス』 * 6」

惠吾が後ろから放つた魔法が直撃した。

「これで、どうだ？」

衝撃で砂煙が上がつている所為で見えなくなつたが突如
ブフオオツ

音と共に発生した風によつて砂煙は無くなり、そこには鎧は碎けて
いるものの、あまり傷を負つていない姿で立つていた。

「ハアハア、さすがに今のは危なかつたぞ。だが、この程度ではや
られんわ！」

「粉碎しろ 大地の片鱗 我が怒りと共に ローガス・トウディア
ス」

男は詠唱を行うと地面に右手を叩きつけた。すると、地面が揺れ
恵吾の足元の地面に複数の亀裂が入ると、爆発した。

「つ！－」

「これでどうだ・・・・・」

それを見たフィーナは驚き声を失い、男は成功し恵吾を倒したと
思つた。

しかし、

「ハアハア、 し、死ぬかと思った・・・」

恵吾は攻撃が放たれた所には居らず、それよりも横の所に膝を付
き、
肩で息をしていた。

「・・・今のでも倒せんか」

そう言い、男は背中に背負っていた刀を鞘から抜き構えた。
「はあああ――――――ツ」

男は叫び恵吾に向かつて突っ込むと同時に剣を上から振り下ろし
た。恵吾はそれを
横に回避したが、振り下ろした剣を僅かに持ち替え横に振り払つ
た。

「ぬおつ！」

それもかわしたが、後ろにあつた木が真つ二つになつた。

「！？」

恵吾は木が真つ二つになつた事にも驚いたが、それよりも木が切
られた時に

電気が走つた事に驚いた。

（さつきの電気、それにあの形つて・・・もしかして、いや、でも・
・・）

ブンッ シュッ

男は休む事無く斬撃と突きの押収を掛けてきた。さらに刀だけで
なく

魔法も混ぜて攻撃をしてきている。フイーナは援護をしようにも
2人の動きが

激しく狙いを定める事が出来ない為、動けないでいた。

暫くの間、攻撃と回避が繰り返されたが、それは突如終わりを
告げた。

ブンッ

「・・・つ！」

男が上から振り下ろした瞬間に先程までの戦いで歪んだ地面に足

を取られ

バランスを崩した。恵吾はそれを見逃さず懐に踏む込み

「『虚刀流一の奥義 鏡花水月』* 7」

恵吾は強烈な拳底を腹に放つた。

「が、あ・・・・・」

呻き声と共に倒れこみ動かなくなつた。

旅の仲間と危険な道行（後書き）

前書きでも書きましたが、リアルで大変だった為に更新が遅くなってしまいました。恵吾のこのクエストが終わり少し話を書いたら、もう一人の方の話も書こうかと思っています。

その為にも出来る限り早く話を書いていきたいです。

技紹介

* 1 『プラクテ・ビギ・ナル アールデスカット』 魔法使い
達 「魔法先生ネギま」

魔法初心者が練習で行う火属性の魔法。威力はライター程度の炎を杖の

先から出すだけだが、込めた魔力が大きければ威力は増す。

* 2 『支配眼』 スヴェン 「BLACK CAT」

目に見える全ての動きがゆっくりに見えるようになる。さらに
その時

自分もゆっくりにはならず、普通と同じ速さで動ける。

但し、肉体に掛かる負荷が大きい為、長時間しようできない。

* 3 『セウシル』 テイオ 「金色のガッシュベル」
自分の周囲だけでなく、任意の離れた場所にも発動できる。
地上で発動すると、地面や障害物に合わせて形が変化し
地中には貼れない。
空中で発動すると球体になる。

* 4 『ゴウ・バウレン』 ウォンレイ 「金色のガッシュベル」

波動を帯びた掌底を繰り出す術。

* 5 『リオル・レイス』 ブラゴ 「金色のガッシュベル」
両手から螺旋状の2つの重力弾を放つ。螺旋状の為に対象を
えぐるようにダメージを与える。

* 6 『ギガノ・レイス』 ブラゴ 「金色のガッシュベル」
黒色の大きな重力弾を放つ

* 7 『虚刀流一の奥義 鏡花水月』 虚刀流 「刀語」
7つある虚刀流奥義のうちの1つ。素早い拳底を放つ。

クエスト完了・・・と思つたら問題発生（前書き）

お久しぶりです。

色々と忙しく筆が進まずに時間が掛かってしまいました。

最近、お気に入りにして下さる方が増えてきて嬉しく思います。
これから多くの人に読んで頂けるよう頑張っていきたいです。

クエスト完了・・・と思つたら問題発生

「はあはあ、つ、疲れた・・・」

恵吾は男が倒れると、ほぼ同時に地面に手を付き座り込んでしまう。

「大丈夫？」

フィーナが近付きそう聞いたが、恵吾は

「大丈夫。ちょっと疲れただけ・・・」

そう言つと、倒れこみそのまま寝つてしまつた。

「う、うん、あれ？ 僕は確か……そつか、そのまま寝つちゃつたんだ」

恵吾が目を覚ますと、周囲はまだ暗く、夜である事が分かつた。周りを見渡すと、

氣絶したままロープでグルグル巻きにされた男達がいた。

「いきなり倒れたけど、大丈夫？」

恵吾の後ろから、フィーナが話し掛けてくる。

「はい。大丈夫ですよ、ティア……」

「フィーナで良い」

恵吾の言葉を遮ると、そう言つた。

「じゃあ、フィーナ。……ここにひりどりする？」

「普通は役人に引き渡すものだけど、今から街に戻つたらクエストに間に合わない。かといって、このまま連れて行つても邪魔になる。何にしても、厄介」

どうするか考へてみると、

「どうするかな……あつ、そうだ。良い方法がある」

「本当？」

「うん。だけどその前に・・・おいつ、起きろ起きろ」

恵吾は落ちていた剣を拾い鞘にしまい、持ち主の男を起こそうと

何度か呼ぶが

起きないので、顔を軽く叩いた。

「ん、俺は、っ！　くつ、動けん・・・」

「目が覚めた？」

「お前は、ちつ、こんなガキにやられるとはな・・・」

男は悪態をついたが恵吾はそれを無視して質問をした。

「あなたに聞きたい事があります。まず何で僕達の荷物を狙ったの

? それともう一つ、

この剣をどこで手に入れたの?」

「・・・・・・・・・・・・・・

恵吾が質問するも男は何も言わずに黙つたままだ。

(仕方ないな。本当は使いたくなかったけど『サトリの能力』*1 を使うか・・・)

「それじゃあ、もう一度聞きます。僕達の荷物を狙った理由、それと剣を何処で手に入れ

たんですか?」

男は黙つたままだつたが

(はつ、何度も聞かれようと俺がウイガレディスの兵だなんて答えるかよ)

恵吾は男が心で何を考えてかを読んだので意味が無かつた。

「なるほど、ウイガレディスか・・・。だったらその武器はやつぱり・・・

(なつ、何でウイガレディスの名前が・・・。それじゃあ、あの剣が・

・・の武器だつて事

がバレたんじゃ・・・・・)

男の心を読み、自分の予想と同じだった事が分かり溜息を付き

「やつぱりそうか。はあ、面倒な事になりそつ

「・・・?」

そう呟いた。傍でフィーナが聞いていたが意味が分からず首を傾げた。

恵吾はこの男達をどうするかを考えた。ただの盜賊や物取りなり
フイーナが言つた通り

役所に引き渡せばいいが、この男は別である。ならばどうするべきか考え

「そうだ、こうすれば良いか『影分身の術』*2」

恵吾が両手の人差し指と中指を交差させると煙と共に2人の恵吾が現れた。

「それじゃあ、よろしくね」

「「あいよ」」

そう言い分身は男達を抱えると元来た道を戻つて行つた。

「・・・・・・・・・・」

恵吾が横に居たフイーナを見ると影分身達が行つた方向を見たまま完全に硬直していた。

心配になつた恵吾が話しかけてみると、

「……今のは何？」

少しの間の後、そう聞いてきた。

「ああ、今のは『影分身』って言つて自分の分身を作る技だよ」

恵吾は何気なしに答えたが

「私は今まで沢山魔道書を読んだけど、その中に幻覚で作るのはあつても実体がある

魔法は無かつたし、聞いた事もない。それにさつきの戦闘であなたが使つた魔法を見た事が無い。あなたは一体何者?」

「・・・・・・ごめん、それは言えないんだ」

恵吾が俯きながらそう言つと、フイーナは少し考え込んだが

「分かった、人には秘密にしておきたい事もある。だからこれ以上は聞かない」

それを聞き恵吾は安堵し、フイーナの方を向くと既に荷物の所に戻つて行き

木にもたれ掛り眠ろうとしていた。その寝顔は、まるで子供の寝顔のように穏やかで、

見ているだけで心が安らぐのを感じると同時に萌えた。

暫くして、眠ったようで寝息を立て始めたのを確認すると、ずつ

と見てみたいと

思ったがそれは不味いと、火の番に集中した。

それからは特に何も起こりず口は昇り朝になり周囲は日の光で明るくなってきた。

「ん、・・・朝・・・」

日差しによつてフイーナは日を覚ますと、やうやく周りを確認する

と、恵吾は起きていて火の番をしていた。恵吾はフイーナに気が付くと

「おはよづ、よく眠れた?」

「・・・(ノク)」

そう聞いた。フイーナは頷き立ち上がると体を伸ばし眠気を払つた。

「それじゃあ、ちょっと荷物を見てもらひえる?朝ご飯を探して来るから」

「分かった」

そう言い、森の中に入り木を調べ数種類の木の実を採取するとフイーナの元へ戻つた。

朝ご飯として木の実を食べた後、荷物を持つと2人は再びブリエスに

向かつて歩き出した。

「・・・・・・・・・・」

歩いている間、2人の間には会話は無く傍から見れば喧嘩をして

いるのか、仲が悪い

ようになっているだろう。だが、2人は別にそういう事は無い。

恵吾は女の子との

会話が苦手で、フィーナは会話をあまりするタイプではないよう

なので

必然的に2人の間には会話が無かつた。恵吾は話しかけようとしていたが何を

話していいのか分からず困惑していたのだが、その時

「・・・聞きたい事がある」

「へっ?! な、何です?」

「昨日の戦闘を見る限り、あなたの強さはこもしくはBはある。な

のにあなたは

Eランク、何故?」

「・・・・・・・・・・」

「それも言えない事?」

「うん、ごめんね」

「いい、それよりもお願いがある、私とパーティーを組んでほしい」「パーティーを?」

「(口く) 昨日の戦闘を見るとあなたは近接系が強い、私は遠距離が得意、戦闘ではバランスが良いと思う。ダメ?」

「そ、そんな事は無いよ。僕もフィーナとパーティーが組めたら凄く嬉しい、って思っていたから・・・・・」

恵吾が囁んだりしながらも、そう返事をするとフィーナは歩みを止めて

「そう、よろしく」

表情を変えずそう告げた。

そのまま歩き続けて行くと森を抜けると、その先には草原が広がっていた。

歩いている途中、先程のパーティーを組む、といつ話もあり少しだが恵吾はフィーナに

話し掛けやすくなっていた。そして、話によって知った事はフ

イーナはロランク

風属性の魔法を得意としている。他の属性の魔法も使えるが風ほどではない。

これだけの事が分かった。

その後、草原を歩いていき2日掛けて目的の町ブリエスに到着した。

ブリエスは、ダルトニア程ではないが多くの方が居て賑わっていた。しかし、恵吾は

町の雰囲気に妙な雰囲気を感じた。

恵吾とフィーナが荷物を指定された場所に持つて行くと「ありがとうございます」といいます、確かに受け取りしました。それではこれが証明書です」

そう言い、何か文字が書かれた書類を渡された。これは確認書で、これをギルドに

持つて行く事でクエストを完了したとして、報酬が支払われるのだ。

「それにしても、あなた方は道中に盗賊に会いませんでしたか?」「盗賊に?・・・

「ええ、実は数日前から配達を依頼した物が届かない、という事がありましてね。それで確認すると、どうやら盗賊に会い荷物を奪われる、という事がありまして中には殺されてしまった人も居るらしいくて・・・・・」

それを聞き、恵吾とフィーナはあの男達の事なのでは、と思い顔を見合わせていると

「その所為で、町の人達もピリピリしているんですよ。それに、この町はウイガレディスのすぐ近くなので、いつ攻めて来られるかと警戒していまして・・・・・」

その後も暫く話しあしだが情報を得る事ができた。話していくうちに恵になつたので

どこかで昼食を食べる事になり、料理屋を見付けると入り食事をした。

昼食を終えて、店を出ると外が先程よりもさらに騒がしくなつており、人々が

慌ただしく動き回っていた。何があつたのかと思いつ町の入り口まで行くと、

そこには見覚えのある顔があつた。

「マダスさん！」

多くの騎士達とその騎士達に指示をしていたのはダルトニアの第2騎士団団長の

マダス・アンダルトだった。恵吾が話しかけると周りの兵達は怪訝な顔をし、

警戒したがマダスはそれを制すると恵吾の方に近付いて来て「驚いたよ、まさかもう此処に到着してるとはね。それにしても君にはまた助けられる事になつたね。君が捕まえたあの男が居なかつたら手遅れになつてる所だつたよ」

「？　あ、あの、それってどういづ……！」

そう言い掛けて、恵吾の頭に分身達がもたらした情報が入つてきた。「……いえ、気にしないで下さい。実は僕も何か役に立てるのではないかと思って急いで來たんです。間に合つて良かつたです」

恵吾とマダスの会話を聞き状況が把握できていかないフイーナは首を傾げていた。

マダスもフイーナに気付いたようすで

「ところで、そのお嬢さんは？」

「彼女は、僕の仲間で・・・」

「フイーナ・ディアウェル」

恵吾が言つよりも先に今まで見て來たフイーナが、そう一言だけ

言うと

再び口を閉じた。

フィーナから視線を戻すと恵吾は

「それで、これからどうするんですか?」

「うむ、すぐにでも部隊を配置し、作戦を考える予定だよ。今回は騎士団だけでなく、ギルドからも募集したからかなりの数になるんだ」

恵吾はそれを聞き、装備が整った騎士達だけで無く装備がバラバラの人達が多く居た事に納得がいった。

「それで、恵吾君も参加するんだり?」

「・・・・ええ、僕としても何とかしたいですから」

「そうか。それじゃあ向こうにギルド用の場所がある、そこに向かってくれ」

「わかりました。それじゃあ」

そう言い恵吾はマダスと別れフィーナと共に他のギルド員が居る場所に行つた。

向かつている途中、

「さつきのどういう事?」

「さつきのつて・・・マダスさんとの事?」

「それもある、何処である人と知り合つたの?それにさつきの会話、どういう事?」

フィーナに、一気に沢山の事を聞かれたので、とりあえず会話の事について

話す事にした。

「ああ、実は『影分身』は消えると見た事や聞いた事が僕に分かるようになつてるんだ。それでさつき分身達が消えて状況が分かつたんだ」

「今はどういう状況?」

捕まえた男はウイガレティスの兵だったんだ。それで、あの場所

で盗賊紛いの事をしてたのは、この町を攻撃するにあたってこの町にある資材を少しでも減らして少しでも有利に運ぶつもりだったんだ。侵略して来る日時は分からなかつたけど、いつ攻めて来ても良いように派遣したみたい

「・・・・・」

「フイーナは無理して付いて来なくとも良いんだよ？」

「（フルフル）パーティーは一緒に戦つもの」

「あ、ありがとう」

そのセリフを聞き、顔がニヤケそうになるものの必死に我慢し平静を保とうと

しているが、我慢しきれておらず、僅かに顔がニヤケていた。

指定の場所に様々な人達が居て、武器の手入れをしている人も居れば、仲間と話して

居る人、等様々だ。恵吾は周囲の人達を見ていた所為で向かいから歩いて来た人と

ぶつかってしまった。

「あっ、すみません」

「ああ～、手前どこに目を付けてやがる。いてえじやねえか」

男はそう言つと、恵吾の胸倉を掴むと怒鳴つてきた。その男の体は大きく、

武器や鎧は派手で厳つい顔をしている。恵吾は面倒な奴に絡まってしまった、と思いつつ

適当に終わらせようとしたが男は
「ここは戦場なんだぜ。テメエみたいな餓鬼が来る場所じゃねえんだよ～！」

恵吾にそう怒鳴つて来た。

（はあ～、面倒くさいなあ。こういう人とは関わりたく無いんだけど・・・）

そう思つていると、

「ギルドメンバーの方達、私はラーキ・ムルフィス。騎士団副団長であるた達に指示を行う者です。さつそくですがあなた達には騎士団の左翼部分を担当してもらいます。細かい指示については時機を見て行います。それでは来て下さい」

それを聞くと男は

「ちつ、まあ良い。どうせ手前みたいな奴は戦闘になつたらすぐに死んじまうんだからな」

そう言い惠吾の服を離すとさつと行つた。惠吾は服を直すと溜息を付き

「はあ、何か戦う前から疲れたな」

そう言つと、戦場に向かう事にした。戦場に向かつている方向を見ると草原が広がつており、山が奥に見えてゐる。どうやら山の向こう側に敵の国があるようだ。

暫く歩くと、到着したのか騎士団は素早い動きで陣形を組み始めた。恵吾達の方には

指示はまだ来ていない。そのまま、少し待つていると先程の人が来て指示を伝えた。

内容は詳しい事は言わねず、敵が来たら最初は遠距離から攻撃して、近付いて来たら

接近戦を行う、それだけだつた。それを聞き惠吾はそんな内容で大丈夫か、と不安になつたが、フイーナ曰く

「正式な人達ならともかく、雇われた私達だと敵に内容がバレる可能性がある。だから、詳しくは言わないし、本隊から離れた所に配置された」

との事。

それから、3日は何も無く時間だけが過ぎていつた。しかし、4日目の朝に事態は

動き出した。

本陣で戦いの準備をしていたマダスの元に、先行させていた兵から連絡が入った。

「報告します、敵を確認しました。およそ2時間後に本陣と戦闘可能な距離まで近づいて来ます。敵の兵力は約2万、その内、魔法士は約8千、他は装備を見た限り歩兵と騎兵、弓兵がそれぞれ4千ほどです」

その報告を聞きマダスは苦い顔をすると

「不味いな、私達は1万3千、おまけにその内の3千はギルドの人間・・・こんなにも数で攻めてくるとは思わなかつたな」

そう言い、周りに居た兵に向かつて指示をだした。

「全軍に通達、2時間後に戦闘が開始。指示に従い移動し戦闘準備を行え」

「はっ」「」

周囲に居た部下達は返事をすると、それぞれ連絡の為に動き出した。

その後、他の兵達やギルド員に指示が行き渡ると、自分達の配置に着き後は開戦を待つだけになつた。

それから約2時間後、先程の連絡通り丘の向こうから敵が見えてきた。

それを確認した瞬間、恵吾に緊張が走る。

(これから本当の戦い・・・殺し合いが始まる。覚悟はしてたけど、やっぱり怖いな。けど、やらない訳にはいかない、か)

そう覚悟をしていると、横からフイーナが

「大丈夫?」

「ははっ、正直なところ全然大丈夫じゃないかな。僕が元居た所じや殺しなんて滅多になかったから、緊張してるし、怖いな・・・で

も逃げる訳にはいかない！」

「・・・そう、それなら私があなたを守つてあげる」

「・・・ありがと」

フィーナの言葉を聞き少し心が安らぐ。恵吾は一度深呼吸をする
と、これから来る

敵達の方を向き意識を集中した。

迫ってきた敵を確認すると、兵達が着てている鎧や持つている武器
は見た事がある物
だつた。

中央に居る兵達の装備は緑を基本とし紫や黄が混ざった色をし、
肩当では半球体で

腰回りにはスカートの様になつており腕や足の装備はゴシゴシし
ていて重厚な

造りをしていた。持つている武器は銀色で逆五角形の銀色の盾と、
リボルバーが

付いている槍を装備していた。

(武器は近衛隊正式銃槍*3に防具はガンキンロシリーズ*4か・
・。それに)

中央の右側に居る部隊は、黄色に青色が所々にあり肩や腕、等の
全身に牙や爪の

様な物が付いている鎧を着て、背中にはそれぞれ剣を2本ずつ背
負っていた。

(レックスSシリーズ*5に双剣か・・・んで)

左側にはオレンジ色を基本とし所々からは刺の様な物が出ている
鎧を身につけ

右手に盾を持ち腰に剣を持っていた。

(ベリオロシリーズ*6に片手剣か・・・)

陣形を見る限りでは、左右の部隊は動きが早いよつになつており、
中央は遅いが

守りには適していないよつた。恵吾が考えていると、味方側の中央、つまり正規の

騎士部隊が居る所から兵達の咆哮が聞こえた。その後、数人がこちらに来ると

「これより戦闘に入る、我らの指示を聞き行動するよ。」

それを聞き遂に戦が始まる・・・恵吾は改めて覚悟を決めた。

「この左翼は遠距離からの攻撃を行いながら素早く前進する。その後、敵が移動速度を上げて来たら、一時下がるように。合図はこち

らで行う。進軍開始！」

その声と共にその場に居た全員が速度を上げ敵に向かって進みだした。

クエスト完了・・・と思つたら問題発生（後書き）

今回は技等の他に武器についても書いていきます。

* 1 「サトリの能力」 サトリ（ぬらりひょんの孫・地獄先生ぬ〜べ〜）

他人の思考を読む事が出来る能力。表層意識だけでなく深層心理まで読む事が出来るので隠し事は出来ない。

* 2 「多重影分身の術」 ナルト 上忍（NARUTO）

自分と同じ姿の実体を持つ分身を生み出す能力。ただし、1撃殴られたりするだけで、消えてしまつ、という欠点がある。分身体が消えるとそれまで見聞きした事や、経験が本体に蓄積されるので、修業においては効率が良い。

* 3 「近衛隊正式銃槍』 ハンター（MONSTER HUNTER PORTABLE 2ND）

銀色のガンランス。機構部分から爆発を起こす「砲撃」と威力の高い「龍激砲」を放つ事が出来る。

* 4 「ガンキンロシリーズ』 ハンター（MONSTER HUNTER PORTABLE 3RD）

「ウラガニキン亞種」の素材から作れる防具。防御面ではそれなりに高い。

* 5 レックスタンドシリーズ ハンター (MONSTER HUNTER PORTABLE 3RD)
「ティガレックス」の素材から作れる防具。スタミナが切れにくくなる。

* 6 ベリオロシリーーズ ハンター (MONSTER HUNTER PORTABLE 3RD)
「ベルオロス亞種」の素材から作れる防具。気配を消せるようになるので、敵に気付かれにくい。

開戦と再開と激闘

恵吾達が居る左翼が前進していき少し近付いた所で

「今だ！放て」

その合図と共に前の方に居た人達は魔法を使える者は魔法を、弓を持つている者は

矢を放つた。だが、それと同時に敵も同じ様に弓兵が前に出ると弓で攻撃をして来た。

恵吾とフィーナが居るのは左翼の中程なので、まだ、攻撃は届いて来ていながら

既に血の匂いが漂ってきた。それに恵吾は顔を顰めて足が止まりそうになるが、

頭を左右に振り、深呼吸を行い気持ちを落ち着けると、敵の方に向き直つた。

暫く、打ち合つていると敵が「兵を後ろに下げる歩兵が移動速度を速めて突っ込んできた。

「今だ、全員反転。全速力で下がれ——」

その声を聞くと、素早い者は直ぐに走り始めたが、遅い者は未だ攻撃をしていて

行動が遅くなっている。その所為で攻撃が弱くなり、何人かは魔法もしくは矢の

餉食になり命を落とした。それでも下がると、突っ込んできた敵右翼に

味方中央の部隊から騎兵が攻撃を加えた。

「突撃——」

横から敵の攻撃を受けた為に耐えきれず、横に居た兵は馬に踏みつぶされたり

槍で貫かれて命を落とした。突っ込んできていた部隊は速さを重

視した

部隊の為、防衛は薄く守り切れていなかつたが、残つていた兵はすぐに

状態を立て直し、反撃に出た。

「「わあああ―――っ」」

「「おおおおおお」」

先程まで恵吾達が居た場所では兵達の戦いが始まつており怒号が聞こえてきた。

それを見ていると、指示をした兵が

「次に部隊を2つにする半分は左に移動し、敵の本隊に攻撃を加える。もう半分は反転し再び敵に遠距離魔法を放つ。展開上、左に行く者は近接系の者が行くように。では、行動開始」

それを聞き、ギルド員はすぐに動き出した。あまり戦闘を行つた事の無い者は

その指示に戸惑いすぐには動けなかつたが、ベテランの者はすぐに動き出した。

戸惑つていた者も周りの様子を見て行動した。

「私達は・・・」

「僕は遠距離魔法も使えるから問題ないよ

「（口クン）」

フィーナと話し合ひ反転し攻撃する部隊になる事にした。

戦場を見ると、敵の中央に居た部隊が味方の中央に対して矢を放つた。矢の数は

そのまで多くなく、防げると思われた。しかし、打ち出された矢は頂点に

昇つた瞬間・・・大量に分裂し数十倍になり雨のように降り注いだ。

突然の事に驚き防ぐ事が出来た者もいたが、ほとんどが全身に矢を受けて命を

落としてしまつたり、生きていても重傷を負つてしまつた。

「無事な者は負傷した者を連れて下がれ。右翼は半分にし中央の補助に入れ」

本隊ではマダスは部下達に指示をしていた。

「魔法隊、まだ駄目か？！」

「もう少しです。もう少しだけ時間を稼いでください」

「くつ、全員、今は被害を最小限に抑えるように行動せよ」

「「はっ」」

兵達は返事をすると、他の部隊に指示する為に散会した。
(このまま、何とか時間さえ稼げれば範囲魔法で一気に有利に運べる。後は、あの男が出ない事を祈るか・・・)

恵吾達がいる所では一回停止し全員が準備をできたところで再び前進を開始した。

恵吾は先程とは違ひ隊の前に立ち準備をしていた。

「・・・・・・・・・・・・」

「戦場が怖いの？」

口を開かず緊張した面持ちの恵吾を見てフィーナは尋ねた。恵吾はそれを聞き

「怖いよ。さつきと違つて前だから戦闘になれば最初に敵と戦う事になる。そうなれば、僕は沢山の人を殺すことになる、それが怖いんだ」

「自分が死ぬのは？」

「僕は自分が死ぬとは思つてないよ。そういう魔法があるから。だからそれ以上に人を殺すって事がすごく怖いんだ・・・・・。でも、戦うつて決めた以上は戦うし敵も殺す」

「・・・・・・・・・・・・」

それを聞きフィーナは何も言わなかつたが、この時しっかりと見ていれば

彼女の僅かな表情の変化に気付いた者もいたかもしれない。
緊張したまま待つていると

「これより前進する。その際、走りながら敵に向かつて魔法で攻撃を加えながら進軍するよつに・・・・行け——つ

それを聞き恵吾も含めて全ての人間が走り出した。

（そろそろか・・・これから先は2度と戻れないな。・・・それ
でも）

敵の所までもう少しの位置まで来た時に恵吾はそう考えた。

爆発しそうなほど
鼓動が速くなつてあり、息も荒くなつていた。

「今だ撃て！」

味方の騎兵が下がったのを確認すると指示をした。

もそれを見て

「うおおおお、『ヴァルカンショック・イグニション』＊1 直径2メートルほどの火の塊を出し、それを敵に向かつて放つた。他にも岩の塊や竜巻、様々な物が敵に向かつて飛んで行つてゐる。だが敵も

黙つてやられるだけではなく、中には魔法で相殺したり武器で切り裂く等を

裂かれたり

焼かれたりして周囲には血や人の焼ける嫌な臭いが漂ってきた。

「え、うるさい」

惠吾は吐きそそがれるか
それに耐えて前を向くが眼前の状況は

飛びかけて足元が振ら付くが

「気を付けて」

横からフィーナが支えてくれたお陰で倒れずにすんだ。

「・・・ありがとう」

そう言つと再び前を向いた。

「・・・・・」

それを見てフィーナは何か言いたそつだつたが、少しすると同じ

様に

目の前に居る敵に目を向けた。

「おおおおーーー」

その時、敵の横から再び怒号が聞こえて来た。確認するともう一方に行つていた

人達が横撃を加えていた。前方に居る恵吾達に集中していた所為もあつて

混乱が広がっていた。恵吾達はそのまま進行すると敵は反転して逃げだした。

それを追いかけようとしていた時、味方の本隊から巨大な炎の塊が敵に向かつて行つた。

恵吾達が攻撃を加えていた時

「マダス隊長、範囲魔法の準備完了しました」

その報告を聞くと

「よし、私の指示と共に発射せよ」

「「「ハツ」」」

「これで終われば良いが・・・」

それから少し、戦場を見ると味方が僅かに押し始めていた。それを確認すると

敵が集中している前線部分に向かつて

「今だ、『メテオ・ラ・ファス』発射」

それを合図に数十人の魔法士が同時に両手を前に出すと15、6

メートル程の

巨大な炎の塊が出現し、敵に向かって放たれた。

「「「うわあ—————っ」」

「「「ぎやああああ」」

それを確認した敵は直ぐに対応しようとしたが、それよりも早く着弾して

周囲に爆炎と爆風が広がり1撃で何百人も倒し、さらに爆風に煽られて

負傷した者も大勢出た。それを見逃さずマダスは

「第2射、『グランド・ラ・パルリオ』発射

次に後ろに居た数十人が前に出て両手を地面に付けると敵の前の地面が

盛り上がり地面から石や砂で固められた高さ6、7メートル程の槍が現れた。先程の魔法で混乱している所に追撃で放たれた魔法に完全に隊列も何も無くバラバラになっていた。

「引けーっ、引けーっ」

その声を聞き敵兵は退却を始めた。それを見逃さず、マダスは追撃を

掛けるように命じた。それを聞き正規兵、ギルド員、関係無く前進し

追撃を掛けようとした。状況は誰が見てもこちらが優勢で負ける、という事は

誰の頭にも無くマダスも勝利を確信していた。

だが、その思いも直ぐに消された。

「「わああ—————っ」」

突然の事に兵は何が起こったか分からず自分が死んだ事すら気づけない者も

居たほどだった。

「な、何が起こった」

前線付近に居た小隊長がそう聞くと、

「あ、あいつが、あの男が・・・」

「つ！」

それを聞き小隊長だけで無く周囲全体に緊張が走った。

そして、砂煙が晴れると先程まで兵達が居た場所には大量の剣や槍が突き刺さつており

「力、力、カズキだ―――っ！！

「あ、魔の剣士つ

様々に驚き恐怖しだした。

お
落せ着け

チ
ン
ツ
！

その音と共に空間に歪みが発生し、地面には5本の切れ目があり、

全員が切り裂かれ死んでいたからだ。

それにより生きていた他の兵達は一目散に逃げ出し先程までの有利な

のか『白眼』で

マントを着て

黒色のシャケジトとスボンを鼻に着けていた。それを見た瞬間恵
は

男の脇をぬけて、一旦籠は走り出しが、隙に脇を下りて、大方が悪吾は何か言った

ようだつたが、惠吾の耳には聞こえていなかつた。

「やつぱりか・・・まずいな、これじゃあダルトニアに勝ち目は無

いぞ

恵吾が全速力で走つていると前線が見えてきた。もつとも前線といつても

かなりの被害を受けて既にボロボロの状態であった。こちらも魔法や矢で反撃をして

いるが全て両手に構えた黒と白の銃^{＊3}によつて撃ち落とされた。
「くっ、まさかあの男が出てくるとは……」

マダスは状況の圧倒的不利さを、どうすれば良いか思案していたが、

「た、隊長、もうすでに我等の近くまで来ております。このままでは……」

「どうする、範囲魔法はまだ使えない、引くしかないのか」

そう言つているとマダスからも目視出来る位置まで一輝が来ていた。

一輝は腰の剣に手を掛け、抜く構えをした。それを見た誰もが死を悟つた。

そして、剣が抜かれる瞬間

「『チャージル・セシルドン』＊4」

巨大な盾が出現し、その場に居た全員を守つた。もつとも、盾には7本の

線によつて抉られていたが。

「はあはあ、間に合つた……のか？」

そこには肩を揺らして息も絶え絶えの恵吾が居た。それを見たマダスは驚き

「恵吾君、何をしているんだ！下がるんだ」

だが恵吾はマダスの方を向くと首を横に振り前を見付めた。

「……久しぶり、かな」

「つ！ 何で……」

恵吾が話しかけると一輝は驚き目を見開いた。

(一輝がそつちに居る理由がよく分からんのだが。実はこの前、襲

つてきた男の頭の中を読んだんだけどいまいち分からなくてね。あ、ちなみに『念話』*5使つてるから頭の中で話したい内容を思い浮かべれば良いから

(こんな感じか?)

恵吾に聞いて一輝はやつてみた。

(うん、それで良いよ。それで早速本題に入るけど、何でそこに居るの?色々な武器や防具を持つていて事やけど……)

(まあ、色々と面倒な事になつててな。一応は異世界から来た勇者みたいな状態なんだ……)

それを聞き恵吾は

(あ~、それは『愁傷さま』。一輝つて勇者とか英雄とかあんまり好きじゃないのにね)

そう言つと一輝は疲れた様子で答えた。

(まったくだ、でも、そのお陰でウイガレディスの姫様と知り合いになれてな、それで……)

(・・・・・ちょっと待て、お前まさか……)

それを聞き恵吾は何となく答えが分かりつつも

(ああ、惚れた!)

少し呆れつつも自分も同じ様な感じなので強くは言えず

(・・・まあ、僕も惚れた子が居るから人の事を言えんが)(そりか・・・んで、どうする?この状況)

一輝に聞かれ恵吾は本来なら止めるべきなのだが、力を手に入れて

未だ満足に發揮する機会が無かつた事もあり恵吾は
(とりあえず、戦う? 正直言つてワクワクしてると)

そう答えた。

(・・・俺もそう思つてた)

一輝はそれを聞き嬉しそうに言つた。そして、2人は一呼吸おき
「んじや、思いつきり行くぞ」

「上等、来い」

2人は口でそう言いつつも『念話』で

(ちやんと加減しろよ)

(分かつてゐる。そつちこそこで危険すぎる物は出すなよ)

そう打ち合わせた。

そして、恵吾は後ろに居たマダス達に

「早く下がつてください。巻き込んでしまうかもしません」

「・・・分かつた」

「隊長!」

「下がるんだ。見ただろ、彼はあの攻撃を防いだんだ」

「・・・・・分かりました」

そう言ひマダスは全員に指示をし、全員が下がつて行くのを暫く待ち、それを確認

すると一輝は金色の鎧に柄が青色の西洋剣^{*} 5を出し構えた。

「『約束された(エクス・・・・・・)』」

そう言つと、剣が金色に輝き始めた。

「『聖逆十字^{クロスクルセイド}』」

恵吾が右手を引くと強烈な電気が周囲に流れ始めた。

そして、

「『勝利の剣^{カリバ}』 * 6」

「『雷裂波^{デリンジャ}』 * 7」

一輝の剣から光と共に衝撃が恵吾に向かつて放たれた。恵吾も右手を前に出すと

巨大な電撃の鳥が一輝に向かつて放たれた。2つは間でぶつかり合ひ、

田も眩む程の光と地面を揺るがす程の衝撃が起つた。それには離れた場所に居た

両国の兵達にまで届いた。

光が止まない内に一輝は飛び恵吾の上まで行くと、再び腰に差した日本刀に

手を置くと

チャンツ

鎧鳴りがし、地面に8本の斬撃の跡が残つた。しかし、そこに既に恵吾は居らず

一輝の後ろに回り、

「『エクスキューシヨナーソード』*8」

右手に光る剣状の物質を纏い振り下ろした。しかし、一輝はそれが当たる前に

既にその場には居らず前方に居た。恵吾が一輝の方を向くと背中部分には紅い機械状の

羽の様な物があり、両腕と両足にも同じ色の機械の鎧を装備していた。

「つ！ 紅椿*9か・・・・・いつ！」

右手に持つた刀で突きをすると、先からレーザーが出て恵吾に迫つた。恵吾はそれを

回避するもバランスを崩してしまつと、一輝はそれを見逃さず「はあつ！」

左手の刀を数回振ると斬撃がそのまま恵吾を襲つた。

「くつ、『マ・セシルド』*10」

恵吾は空中に円盤のピンク色の盾を出しそれで防いだ。だが、盾が消えた時には

間合いを詰めており両手の刀を振り下ろしてきた。恵吾がそれを交わすと、蹴りが

迫つて来た。それも紙一重で交わした、そう思つたが、踵部分が展開しエネルギーの

刃が出て恵吾の体を切り裂いた・・・かのようにみえたが、それは残像で恵吾は

真下に居た。

「『龍拳』*11！」

そう言つと、全身に纏つていた魔力が金色の龍となり、恵吾と共に一輝に

向かつて突つ込んで行つた。

開戦と再開と激闘（後書き）

今回、ようやくもう一人の主人公である一輝が登場しました。何だか長いようで短かつたと思います。（笑）

恵吾と一輝が『念話』によつて会話をしているシーンなのですがもう少し上手に書きたかったのですが、中々上手くいかず、少し変になつてしましました。一輝の現在の立場は本編で語られたように

勇者扱いされています。もっとも、本人の希望でその事を知っているのは

国の上層部の数人だけ、という事になつています。

一輝の持つ武器の形状を説明で書いたのですが、それでは分かりにくい

と思い、『紅椿』は恵吾に無理に言つてもらいました。これからも、同じ様な事があるかもしませんが、温かい目で見守つて下さい。

技・武器紹介

* 1 『ヴァルカンショック・イグニション』 照山 ブレイド
(NEEDLES)

高温の巨大な火球を相手に向かつて放つ。

* 2 『長い日本刀』 バージル (Devil May Cr

y)

本編で何度も居合切りの要領で使つていたのはこの刀。

名前は『闇魔刀』^{やまと}という名前。空間」と斬り裂く能力がある為、刀でありながら遠距離攻撃が可能。一瞬で複数回攻撃する事ができる。

* 3 『黒と白の銃』 ダンテ (D e v i l M a y C r y)

名前は『エボニー&アイボリー』 黒色と白色の大型2丁拳銃。

* 4 『チャージル・セシルドン』 テイオ (金色のガッシュュベル)

下半身が巨大な盾の女神を召喚する。女神の胸には水晶があり、誰かを

守りたい、という思いが強ければ強い程、強度が増す。破損しても修復する事が可能。

* 5 『念話』 魔導士 (魔法少女リリカルなのはシリーズ) 今回の念話は、なのはシリーズのを使いました。他の作品にも同じ様な技はありました、今回はこちらを使いました。理由は何か動きをしたりせずに、ノーモーションで行えるからです。

* 6 『約束された勝利の剣』 セイバー (F a t eシリーズ)
アーサー王の持つ剣。真名を解放する事で、魔力を“光”に変換して
斬撃として放つ事が出来る。

* 7 『聖逆十字雷裂波』 真弥 (私の救世主さま)
強烈な電撃を鳥の形にして相手に放つ技。

* 8 『エクスキュー・ショナード』 エヴァンジェリン (

魔法先生ネギま！（）

個体や液体等の物質を無理矢理に気体に相転移させて相手を消滅させる技。

これを受けたと対象は塵も残らず消える。

* 9 「紅椿」 築（インフィニッシュ・ストラトス）

両腕型脚に展開装甲というのを装備しているので、そこからエネルギー刃

を出して、攻撃する事が可能。また、それを防御に使う事も可能。

飛行速度も速く高速戦にも優れている。

右手に持っている刀は兩月、刺突を行うと先からレーザーが放たれて、

左手に持っている刀は空裂、斬撃をエネルギー刃として放てる。

* 10 「マ・セシルド』 テイオ（金色のガッシュベル）

金色の淵の中にピンク色のエネルギーがあり、中央には2枚の白い羽状の

装飾があり、円形をした盾。かなりの強度を誇つてあり、銃弾程度では

ビクともしない。

* 11 「龍拳』 悟空（DROGON BOLE）

本来は気が金色の龍となる。全身に気を纏い相手に高速で突つ込み

貫き消滅させる技。

ちなみに、龍は東洋のもと、西洋のドラゴンではない。

込み

決着、そして告げられた。

『龍拳』により加速した1撃で一輝は倒されたかと思つたが、
「『熾天覆う七つの円環』*1」

一輝の前に大きな赤い花弁状の盾が7枚出現し恵吾の攻撃を防いでいる。

だが、花弁はすぐに亀裂が入り砕けた。しかし、一輝は砕けるまでのその僅かな

時間の内に離脱すると地上に着地した。そして、『紅椿』を消すとスーツケース*2を出した。

すると、ケースが原形を留めない程、変形して肩で担ぐ程巨大なミサイルランチャーにな

なった。

そして、一輝が引き金を引くと、大量のミサイルが発射された。
「『デイボルド・ジー・グラビドン』*3」

だが、恵吾の前に複数の球体が入った巨大な球体が出現し、ミサイルを吸い込むと

ミサイルは球体の内部で爆発せずに消滅した。

恵吾はそれを確認すると地上にゆっくりと降りて、一輝を見据えると、一呼吸おき

一瞬で間合いを詰めた。そして、攻撃に移ろうとしたが、一輝は柄に髑髏の

装飾が施された剣*4を出すと、それを振り下ろし切り掛かつて来た。

「いつ！」

恵吾は急停止して、ギリギリ交わす。だが、一輝は休まずに続けて連続で

剣で切り掛かる。何とか恵吾は交わしながら『月衣』に収納してあつた以前、

盗賊から奪つた刀を取り出すと構える。すると剣が光に包まれていき＊5

切り掛かつて行つた。

「はああああああつ」

「うおおおおおおおつ」

そして、2人は持つ剣での高速の切り合いが始まった。その切り合いは

お互いに一步も引かない。

恵吾が上段と下段の連続斬を放つと、一輝はそれを弾き今度は逆に、左右からの

連撃を放つ。恵吾は、それをかわすと体に向かつて連続の突きを撃つ。

だが、一輝は剣で全て防ぐと、そのまま反撃に出た。

既に何十合打ち合つたか分からぬ程、2人の剣戟は続いている。お互いに一步も

引かない。切り合いによつて2人は体中に切り傷を負い血が流れている。地面は2人の

流した血によつて、真っ赤に染まっている。だがそれでも、2人は恐れる所か、

その顔には笑みさえ浮かんでいた。

「うおおおお———つ」

「んああああ———つ」

2人の戦いは、このまま永遠に続くのかと思われたが、

「「うおおおおおお———」」

互いに振り抜いた1撃によつて恵吾の刀は折れ、一輝の剣は後方に吹つ飛ばされた。

「「……」「」

2人は肩で息をしながら、暫く睨みあつてゐる。

(もろもろ、終わりにしない ? さすがに疲れたし、体中が痛い . . .)

惠吾の提案に一輝も

(そりだな、それじゃあ、またその内に . . .)

同意した。そして、2人は後ろを向くと、其々の陣営に戻つて行つた。

戻ると同時に一輝は倒れこむと、衛生兵に連れられて行つている。惠吾は、戻ると一輝と同じ様に倒れかけたが何とか両足で踏ん張つたが

気を失い倒れてしまった。

「 . . . ん、ここは? . . . つ ! あ、あたたつ . . . 」

惠吾は田を覚まして起き上がろうとしたのだが、体中に走る痛みで一気に田が覚めた。

痛みに苦しみながらも、周囲を確認すると、誰も居らず広い部屋にあるベッドに

寝かされていたようだ。さらに、体中に包帯を巻かれているので、治療が

終わつてからベッドに寝かされた、という状況のようだ。体をゆっくりと倒し、

暫く待つていると、マダスが数人の兵と共に入つて來た。

「 あ、マダスさん 」
「 」

天幕に入つて來たマダスは、難しい顔をして何も言わず、惠吾の方を見ている。

「 . . ? あの、どうしたんですか? 」

それを聞きマダスと兵は姿勢を正す。そして、

「御気分はよろしいでしょうか？ 何かあればお申し付け下さい」
そう告げた。恵吾はそれを聞くと、

「……はい？あの、なにが……」

訳が分からず戸惑つてしまつた。

「あなたは、ウイガレディス最強と言われている男と互角に渡り合
われました。ですので、こちらとしても最大のおもてなしを、させて
頂きます」

それを聞き納得はしたが、恵吾はむず痒くなり、

「……いや、あの、普通にしてくれませんか？ なんだか、逆にこ
ちらが緊張してしまいますので……」

「……では、そうさせてもいいよ？」

マダスは少し考へると、納得したようで以前の話し方に戻つた。

「はい、それで、一体何がどうなつたんですか？」

「あの後、気を失つてしまつた君をこちら陣に連れて来て治療をし
たんだ」

「そうですか…あれからどうなりましたか？」

先程から気になつっていた事を聞いてみると、マダスは落ち着いた
口調で

「君が氣絶してから2日たつてゐる。ウイガレディスの兵達は撤退
したよ。兵の損害もそうだが、それ以上に士気が下がつてしまつて、
戦線を維持できなくなつたようだ」

そう言つた。それを聞き恵吾は少し安心した。

「……これからどうなるんですか？」

「ああ、私達は3部隊を残して、一旦ダルトニアに戻るつもりだよ。
ははつ、なんだか前にも同じ様な事があつたね」

それに釣られて恵吾にも笑みが浮かんだ。

「……それで、君にはすまないが、もう一度城と一緒に来てもらつ
よ。」こちらとしても、あの男とともに戦える戦力を無視しておく
事は出来ないからね。先日のように簡単にさよなら、といふ訳に

はいかないんだ」

「…分かりました。いつ頃に出発しますか？」

「ふむ、兵の準備があるので…・・・・・10日は掛かるな。何せ重傷者も多く居る。今、満足に動けるのは少ないからな」

それを聞き、なるべく早く移動したい恵吾は

「…なら、怪我人の所に案内してください。僕が治します」
そうマダスに言った。

「ありがたいが、その前に君は自分の怪我を治したほうが…」

「それもそうですね。『ジオルク』*6」

だが、マダスは申し訳なさそうに断つたので、自分の治療の為に恵吾が魔法を発動させた。すると、体中の怪我がすぐさま消えていき、

あつという間に全治した。

「……君には本当に驚かされる。あれだけの怪我を、いつも簡単に治すとは。これなら兵達の治療も期待出来そうだ」

部屋を出て廊下に出ると多くの人達が忙しく働いている。

「ここは、ブリエスにある宿泊施設で、恵吾が眠っていたのは、最上級の部屋だつた。

マダスに連れられて、歩いて行くと大きな扉の前に着いた。扉を開けて中を見ると、

大勢の怪我人が寝かせられている。ここは普段なら、宴会等を行う大広間なのだが、

現在は緊急で怪我人のほとんどが、この部屋に運ばれたようだ。
怪我人の他には治療を行っている者や、怪我人の仲間なのか話しがけている者等もいる。

「見ての通り、人手が足りない上に怪我人が多くてな…」

「分かりました。それじゃあ『シン・サイフォジオ』*7」

呪文を唱え、両手を上に向けると4本の剣が十字型に展開して中央に羽の付いた物が

出現した。それと同時に、周囲に光が満ち始めた。光が部屋中に行き渡ると、先程まで

苦しんでいた兵達が穏やかになつていき顔色も良くなつていて。

そして、寝ていた兵達から声が上がつた

「う、腕が動くぞ!」「体の痛みが消えた…」「…」

…

それを見たマダスは、

「……もう驚く事は無いと思っていたが、どうやらこれからも色々と心の準備が要りそうだな……」

誰に言つでもなく、そう呟いた。マダスの周りに居た兵達も、ただ茫然とこの状況に

驚いているようだ。

その後、怪我が治つた者達は戻る為、物資の片付け等の準備を始めた。

そんな中、恵吾はマダスの許可を得てフィーナを探す為に、陣営を歩きまわっている。

だが、人数が多い所為もあって中々見付けられないでいる。おまけに、周囲の人間の

ほとんどが恵吾を見ると、仲間内でコソコソと話をしたり、目を合わせないようにしているので、誰かに聞く事も儘ならない。

そのまま。暫くすると、見た事のある後ろ姿を見付けた。

「フィーナ、良かった中々見つからないから、どうしようかと思つてた」

「…………」

恵吾が近付き話しかけると、フィーナはこちらを向きはしたが、

何も言わず恵吾を

ジックと見ている。

話しかけてから、少しの間、気まずい空気が続いるが、恵吾はそれに耐えられなくなり

「あ、あの、フイーナさん？……」

「正直に答えて。あなたは一体何者？」

表情は何も変わっていないが、その声には威圧感が含まれている。

「…分かった、けど、ここだと話したくから場所を変えても良い？」

「（ハクン）」

フイーナは頷くと、歩きだしたので恵吾も着いて行つた。

暫く歩くと、ブリエスから南にある草原に着いた。周囲には誰も居ない。

「ここで良い？」

「そうだね、それじゃあ、何から話そつかな……。ねえ、フイーナは異世界、もしくはパラレル・ワールドって言葉を聞いた事がある？」

恵吾はフイーナに聞いてみるが、

「…（フルフル）」

知らないようだ。恵吾は少し考えると、

「そつか、じやあそこから話さないとな。異世界つていうのは、こことは違う異なつた歴史を進んだ世界、もしくは根本から違う世界、つて事かな」

その説明を聞くとフイーナは

「……なんとなく分かった。」

そう言った。

「それで、僕はその違う世界から来たんだ」

恵吾の話を聞き終わると、フイーナは黙つたまま暫く考え込んでいたが、

「……普通なら信じられない。でも、あなたの使う魔法は見た事

のないものばかり。だから信じる

そう告げた。それを聞き恵吾は信じて貰え、嬉しくなった。

「……あなたに聞きたい事がある。あなたの魔法の中にどんな病気でも治す事が出来る魔法は存在する?」

「?まあ、いくつか心当たりがあるけど…」

突然の質問に、疑問を持ったが、素直にフイーナにそう告げた。

それを聞くと

フイーナの表情が明らかに変わった。

「つ! お願いがある。治療をして欲しい人が居る」

そして、今までで最も大きな声で恵吾にそう言つと、頭を下げてきた。恵吾はそれに

少々驚いていると

「お願いつ! 叶えてくれるなら、私に出来る事は何でもする」「な、何でも……」

何でもする、というのを聞き恵吾はフイーナの方を見たが、すぐに首を振り

一旦、落ち着くと事にした。

一度、深呼吸をして落ち着いた。そして、

「仲間なんだから、そんな、なんでもする、とか言わなくとも大丈夫だよ」

恵吾が冷静に告げるとフイーナはキヨトンとしたが、すぐに

「ありがとう」

小さな声で、そう言った。

決着、そして告げられた。（後書き）

とりあえず、今回で一輝との一回目の戦闘は、終了しました。いくつか出したかった武器が出せたのは、書いてて嬉しかったです。

戦闘シーンですが、本当はもっと派手にしたり、長く書きたかったのですが、中々うまくいきませんでした。

それと、武器が本編では、上手く説明できなくて、後書きに頼りっぱなしに

なりかけてしまっているのは、何とかしたいのですが、本編であまりグダグダ書いても読みにくいですよね？

一輝はこれでまた、暫らくは登場しなくなります。

その内、一輝サイドの話も書こうと思っていますが、それは恵吾サイドが

ある程度の区切りに、入ってからにしようかと、思っています。

技・武器紹介

* 1 「熾天覆う七つの円環」 アーチャー 士郎 (Fate/stay night)

本来は飛び道具に対して有効な盾。一枚一枚が、城壁と同等の強度を誇っている。

* 2 「災厄兵器バンドリフ」 ダンテ (Devil May Cry4)

普段はスーツケースの形をしているが、666種類の武器に変

形する。

といつても、原作で使用されたのは6種類のみ。

本編で使用したバズーカ砲は(ヘイトリッヂ)という名前。

*3『ディボルド・ジー・グラビデン』ブリガ（金色のガツシユベル）

形状は本編で述べた通りで、空間」と捻じ曲げて押しつぶす術。

*4『リベリオン』ダンテ（D e v i l M a y C r y
シリーズ）

両刃の長剣。

*5『光渡し』優人（おまもりひまり）

他者の力の増幅や、物を強化する力。

これを附加されると、ただの棒きれでも名剣、名刀と同じ位の威力を持つようになる。

*6『ジオルク』ダー（金色のガツシユベル）

自分の肉体をすぐに再生、回復させる。

*7『シン・サイフォジオ』ティオ（金色のガツシユベル）

自分以外の、味方を回復させる事ができる。

アラフルと対話

フィーナの言葉を聞き、恵吾は少し照れてしまつたので、それを隠す為に

「ほ、ほら此処に居ないで早く戻ろう。って、そういうば僕は一旦、ダルトニアに行かない、駄目なんだけど…大丈夫?」

そう言つと、

「（口クン）ダルトニアは通過点だから問題無い」

恵吾はそれを聞き安心した。その後、フィーナからその人の事を聞くと

どうやら、怪我ではなく病氣だといつ事が分かつた。それと、そこはダルトニアを通過

すると一番早く到着するようだ。2人で話し合つた結果、恵吾が城に行つてゐる間に

フィーナが、移動に必要な物資等を準備しておき、恵吾が戻つてから一緒に行く、

という事になつた。

恵吾達がブリエスに戻ると、負傷した兵達が居なくなつたので、準備も早く

なつており、2日後には出発する事が出来るよになつていていた。

恵吾は

その間、マダス達から「えられた部屋に居る事となつたのだが、その部屋は宿の

最上級の部屋、少し前までは一般庶民であつた恵吾には縁が無かつた

装飾等があり、どうにも落ち着かず、部屋の中を

ウロウロとしている。暫く、そうしていたが、やはり落ち着かな

いので外に出ようとも

考えたが、何かあるといけない、といった理由で数人の兵が着いて来るので

落ち着かない。食事も部屋にメイドが持つて来るので、外に出る必要も無い。

はつきり言つて、かなり窮屈な状況だ。ベッドに寝転んでいると、コンコン

部屋の扉がノックと共に向こう側から女の子の声が聞こえた。

「あの、お食事をお持ちしました」

「はい、どうぞ」

そう恵吾が言つと、ゆっくりと扉を開けて小柄なメイドが食事をお盆に

載せて入つて來た。

戦闘が予想よりも早く終わったので、食糧に余りがある為、少々豪華だった。

少女はテーブルに食事を置くと、お茶を準備しようとした。

だが、その時、躊躇してしまい転んでしまった。それだけなら、まだ良かつたかも

しないが、その時に持つていたポットは手を滑り抜けて、椅子に座ろうと

していた恵吾の頭の上に落ちてしまった。

「あちゃーーーっ、だ、だ、頭が・・・」

そして、突然の衝撃と共に頭や顔に熱いお茶が掛かり、混乱しながら恵吾は床を

転げ回つた。

「はあはあはあ、び、びっくりした〜・・・」

少し落ち着いた恵吾がそう言い、立ち上がると床にはポットと零れたお茶があり、

それと、顔が真っ青になり座り込んでいる少女が居た。

「あ、あの、私……」

動搖し、何を言えば良いか分からず、困惑していると、

「恵吾殿、どうされました！？」

外に居た兵の声が聞こえた。それを聞くと、少女は体を震わせ、先程よりもさらりと

顔を青くしている。

「・・・何でもありません。ちょっと転んだだけです」

「そうですか？なら良いのですが・・・」

そう言つと再び静かになつた。それを確認した恵吾が少女に近付

き手を差し出し

起こすと

「あ、あの、すみません。私、恵吾様にご無礼を・・・」

そう言い頭を下げた。まだ、体を震わせているが、先程よりは少しだけ顔色が良くなっている。

「ああ、気にしなくて良いよ。ちょっと熱かったけど、大丈夫だから・・・」

恵吾がそう言つと、頭を上げた。田には涙を溜め今にも泣きだしそうだ。

それを見て恵吾は罪悪感を受けた。

「それで、えつと・・・・・」

「あ、マリナと言います」

「マリナちゃん？僕は本当に大丈夫だから気にしなくて良いよ」

それを聞くと、マリナは落ち着いたようで涙をふくと

「はい。ありがとうござります」

そう言つと、落としたポットやお茶を片付けて、部屋を出て行つた。

マリナを見送った後、食事をして暫くすると再びマリナが今度は

食器類を

片付ける為に恵呂の部屋に入つて來た。

「お食事はお済ですか？でしたら、食器を下げるが・・・」

「ああ、ありがとう。もう終わっているから大丈夫だよ」

それを聞き、マリナは食器を持つと、お辞儀をして部屋を出た。

部屋を出たマリナが食器を持ち、厨房に戻ると3人のメイドが近付いて來た。

「あら、マリナ。あんた無事だったの？ てっきり、何か粗相でもして首を斬られてると思ってたけど」

真中に居たメイドがニヤニヤしながらマリナにそう言つと、他の2人もクスクスと

笑つている。それを聞きマリナは顔を俯かせながらも、無視をして進もとしだが、

「ねえ、聞いてるの？ あんたみたいに暗い子、仕事が務まつたの？」

「……」

マリナは3人を避けると、そのまま厨房に走つて行つた。それを、見て3人は

「まったく、嫌になるわね。あんなのと一緒に仕事なんて」「ええ、どうにか居なくならないかしら・・・」

「それなら良い手があるわよ。あのね……」

夕食後、暫く部屋に居た恵呂に、部屋の前に居た兵から「恵呂様、お風呂の準備が出来ましたが、どうされますか？」

「お風呂か……」

今日はそれなりに汗を掻いたのと、元々、風呂好きだった事もあり入る事にした。

風呂はこの宿の1階にあり、かなりの大きさである。兵達と共に

風呂に行くと

そこには誰も居ない。

「あれ？他の人は？」

惠吾の質問に、兵の内の1人は

「私は恩君様の負しセリてす。我等は恩君様の御向へらせて打き

それを聞き、恵吾は少し申し訳なく思うが折角なのだから、と楽しむ事にした。

事にした

「さあ、お湯たな、お風呂用具を……」

な
いが
シ
「
が無い。ソレ不思がた
さ
は

そう呟いていた時、脱衣所から小さな物音がした。

卷之三

たせてくると、

脱衣所との間の扉が開く。すぐそちらを見ると、そこにはタオルを本の前二葉、二枚のワイド露出。

「.....へ？え？え、ええ————つ！！」

恵五はおそらく人生で最大の混戸と大声を記録したであつた。

卷之三

だが、『白眼』が湯気を透視しているので、フイーナの綺麗な白い肌や、

胸元の僅かに膚らみが完全に見えてしまったのだ。

この状況に冷静になる事など、不可能といつても過言ではない。混乱を極めている恵吾を余所にフイーナは少し顔を赤くしながら

七

恵吾に近付いて来くる。

「え、ちゅ、いや、あれ、え、え？」

まともに話せていな惠吾にフイーナは

「落ち着いて、深呼吸」

「あ、ああ。すー、はー、すー、はー……よし落ち着いた。それで、何でここに？ というかその姿は？」

『白眼』を解除し、後ろを向くとそのままの状態でフイーナに話し掛けてみると

「あなたは、私の願いを聞いてくれると言つた。だから、私に出来る事は可能な限り行いたいと思った。男はこういった事が好きだと思った。違つた？」

「いや、違わないけど……とにかく今は戻つて！ 恥ずかしいからそれを聞き、少し考え込んだが

「分かった」

そう言い、出て行つた。

「…………なんか、どつと疲れた。っていうかフイーナどうやつて入つて來たんだ？」

些細な疑問を持ちつつも、再び浴槽に入りリラックスする事にしだした。

「ふう、……それにしても驚いたな。フイーナがあんな……」

そう言つと、風呂場で見たフイーナを思い出してしまつた。

「…………止めどいつも。これ以上はきつい」

そう言い、頭を軽く振り一旦、忘れる事にした。脱衣所を出て部屋に戻つた

恵吾は、ベッドに寝転ぶと直ぐに眠気が襲つて来て、眠りに着いた。

恵吾は夢を見ている。それはこの世界に来る前の生活、暫く、そのまま見ていると、一輝が出てきた。そして、

「まったく、昼間は大変だつたな。体中が痛かつたぞ

「…？」

恵吾には意味が分からなかつた。昼間と言われても、今日は一輝に会つていない。

なのに何故？そう思つていたが、すぐに意識がはつきりし「どうか、これは夢か……」

「ああ、ようやくはつきりしたか

一輝は呆れたように言つと恵吾が

「悪い悪い、つてどうやて僕の夢に入つて來たの？…まさかこの一輝は僕の夢の中の登場人物なのか？」

まさかと思い、そう言つてみると

「違うわ！」『コメグラス』*1と『夢コントローラー』*2で入

つたんだ」

それを聞き納得した。だが、それと同時に疑問が浮かび

「ああ、なるほど。つてちょっと待て。あれは対象を直接見ないと駄目なんだぞ。つまり僕の部屋に入つてゐつて事か？一体…」

何となく予想はついていのだが、

「もちろん『どこでもドア』*3で入つたに決まつてるだろ」

それを聞き恵吾は頭が痛くなつた。そして、同時に秘密道具の性能に少し疲を感じた。

「…………ドラえもんの道具つて今さらだけど、ある意味、どんな宝具よりも危険な氣がするんだけど…………」

ついつい、溜息と共に呟いた。

「まあ気にするな

「…それで、何の用なの？」

「ああ、今後の事について話し合ひをしようと思つてな

一輝は真剣な表情になるとさう告げる。恵吾も真剣な表情になると話し合いを始める。

「とりあえず、こつちの今の状況は、侵略に失敗したのと俺が引き分けた事で、かなり動搖が広がつてて、侵略は不可能つて事で退却

した「

退却した事に安堵し、呴くと涙になっていた事を一輝に聞いてみる事にし

「そつか、…それでこの戦争は元々なにが原因か分かる?」

「そう言ひと、一輝は

「ああ、確かにそつちの国が攻めて来たから、それを迎撃してゐるうちにこつちから攻めよう、って話になつたみたいやぞ。…ただ、何かキナ臭い感じがするんだよな~」

最後にそう付け加える。

「…分かつた、なら僕の方でも色々と調べてみるわ。…そう言えば、一輝つて、こつちではかなり恐れられているみたいやけど、一体何をしたの?」

「ああ、こつちに来てから何度も戦場に出たんやけど、その時に『ゲート・オブ・パロゾ』王の財宝^{*}4とか『エクシア』^{*}5で殲滅したりしてたから、多分それが原因だと思うぞ」

一輝の使用したのを聞き、呆れて

「おいおい、そりやまあ恐れられて当然だな……」
「そう言い終わると、2人は少しの間、何も言わなかつたが
「さて、それじゃあ、そろそろ帰るで。それじゃ
「ああ、んじや」

一輝がそう言ひ、恵吾の夢から出て行つた。

トライフルと対話（後書き）

お久しぶりです。更新が、かなり遅くなってしまいました。
リアルが忙しく中々筆が進まず、今まで掛かる事となりました。

それと、最近撮り溜めてた深夜アニメを見ていたりした所為もあり
大変です（笑）

技・道具紹介

* 1 『コメグラス』 ドラえもん（ドラえもん）
かけると、他人の夢を見る事が出来るようになる。

* 2 『夢コントローラー』 ドラえもん（ドラえもん）
『コメグラス』を掛けた状態見た夢を自在に操れる。
また、夢の中に入る事も出来る。

* 3 『どこでもドア』 ドラえもん（ドラえもん）
行きたい場所を思い浮かべて、ドアを開けるとそこに行ける。但し
特殊空間や地図に登録されていないといけない。それと、他人に
見られたくない場所には入れない。

* 4 『王の財宝』 ギルガメッシュ（FATEシリーズ）
バビロニアの宝物庫と、そこに繋がる鍵剣。

収納してある武器を、弾丸のように大量に放出できる。
中には、どれだけでも入るので武器以外にも収納可能。

* 5 『ヒクシア』 刃那（機動戦士ガンダム00）
運動性に優れたフレームを持つ。近接格闘用に発展・特化されて
いる。

各部に5種7本の剣を装備している。他にバルカンやライフルになる剣も装備している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529v/>

飛ばされた2人のチート

2011年11月24日21時03分発行